

世界の児童と母性

海外福祉情報

*MOTHER AND CHILD
WELLBEING
AROUND THE WORLD*

*CURRENT
OVERSEAS INFORMATION*

第9号

1979年10月

編集委員 (50音順)

加藤 翠

日本女子大学教授

五島 眞次

武蔵大学教授

田村 健二

東洋大学教授

高城 義太郎

厚生省児童福祉専門官

辰見 敏夫

東京学芸大学教授

平井 信義

大妻女子大学教授

福田 穂穂

明治学院大学教授

森 重敏

東京都立大学教授

斎藤 武

資生堂社会福祉事業財団
常務理事



クウェート：
ナツメヤシ
……ヤシ科



アラスカ州：
ワスレナグサ
……ムラサキ科



タンザニア：
イカダカズラ
(アーゲンビレア)
……オシロイバナ科



ブラジル：
ヒノテラン
(カトレア)
……ラン科



ベトナム：
カエンボク
……ノウゼンカズラ科



リベリア：
ギネアアブラヤシ
(アブラヤシ)
……ヤシ科



ニュージーランド：
ヨツバネエンジュ
(コーハイ)
……マメ科



フィリピン：
アラビアジャスミン
(サンバキータ)
……モクセイ科



スペイン：
セイヨウバラ 赤
(バラ)
……バラ科



タイワン：
ボタン
……ボタン科



ミクロネシア：
ココヤシ
……ヤシ科



メキシコ：
ダリア
……キク科



ナイジェリア：
カカオノキ
……アオギリ科



イラク：
セイヨウバラ 赤
(バラ)
……バラ科



インド：
インドボダイジュ
(チンジクボダイジュ)
……シナノキ科



レバノン：
レバノンシギ
……マツ科

世界の花：国花(樹)と州花

世界の児童と母性—海外福祉情報—第9号 国際児童年特集 1979年10月

MOTHER AND CHILD WELLBEING AROUND THE WORLD -CURRENT OVERSEAS INFORMATION- No.9
AUTUMN ISSUE OF 1979, 2nd SPECIAL NUMBER FOR 1979 INTERNATIONAL YEAR OF THE CHILD

フィリピンの児童福祉事情	大谷嘉朗	2
タンザニアの子ども—責任の分担—	鈴木優梨子	6
ナイジェリアの子ども	宮崎安子	10
レバノンの家庭生活と子ども	小山則子	14
ベトナム・ホーチミン市の保育問題	グエン・ティ・リエン・ホア	18
韓国の児童福祉と教育	帆足喜与子	22
フランスの子ども—育児と教育—	寺内礼治郎	26
インドの建設現場の移動託児所	山口 真	30
台湾の小学生—2つの家庭とその生活—	廖 高義	34
ミクロネシア・トラック諸島の子ども	古市 慎	38
メキシコの子ども—文化と伝統—	山本哲士	42
イラクの子どもとその環境	佐藤由美子	46
スペインの国柄と子ども	香川純子	50
アラスカ州エスキモーの暮らしと子ども	武藤静子	54
ブラジルの子どもの日系の子どもの生活と問題点	横山定雄	58
ニュージーランドの少年非行対策	武川 篤	62
リベリアの子ども—貧しい現実と150人の大家族—	パトリシア・クラーク	66
クウェートと教育	荒川弘子	70
第6回国際社会福祉協議会アジア西太平洋地域会議	郷地二三子	74



子どもを主題に扱ったモンゴルの郵便切手（実物大）

子どもについて語る	79
編集後記	80
世界の花：国花(樹)と州花	
財団だより	

フィリピンの 児童福祉事情



大谷嘉朗

日本ルーテル神学大学教授

国家経済発展計画に組み込まれた児童福祉施策の展望

児童福祉に対するフィリピン共和国の国家的施策ないし政策方針は、1975年を節目として、活発な動きを見せようとしている。

その第1に、1975年6月10日大統領令第603号として発効した児童青少年福祉法（Child and Youth Welfare Code）が挙げられる。同時にこの法律に基づいて、大統領府児童福祉委員会（Office of the President: Council of the Welfare of Children）が設置された。

これは保健・教育・福祉・労働・司法などの各省庁にまたがる、児童青少年福祉にかかわる諸事項の調整・総合企画・推進に当る中枢機関として機能することになるのである。

第2には、1976年12月に第1回大統領主催児童育成全国会議（President's First National Conference for the Development of Children）が開催され、フィリピン児童のための10か年、1977年～1987年（Decade of the Filipino Child, 1977～1987）が宣言され、大統領布告

1604Aとして、児童青少年育成のための国家行動計画（National Plan of Action for the Development of Children and Youth）の大綱が宣言された。

第3には、1978年11月、E S C A P（国連アジア太平洋経済社会委員会）後援のもとに、国際児童年アジア太平洋地域会議（Regional Consultation on the IYC for Asia and Pacific）を主催国としてマニラで開催し、児童福祉推進向上のための一大国民啓発運動を展開したのであった。

第4には、上記大統領布告を受けた形で、1978年4月から作業に取掛かり、約1年の日月をかけて1979年2月、フィリピン児童のための10か年包括的国家計画書（Comprehensive National Programme for the Decade of the Filipino Child 1977～1987）を発表したことである。これは、フィリピンにおける児童の状況に関するNEDA（国家経済発展機構）—UNICEF共同調査（NEDA—UNICEF Study on the Situation of Children in the Philippines）のための基礎資料として作製された児童擁護文書（child advocacy document）でもある。



全国の30%を占める最貧困階層の住宅環境



幼児の簡易栄養補給給食プログラム、ルソン島北部山岳部族民の小部落

第5には、フィリピンにおける児童福祉施策の強力な推進に、現政権がどれほど力を入れているかという事実の現れとして、国家経済発展機構（National Economic and Development Authority; NEDA）によって策定され、1977年9月大統領令第1200号として、国家総合発展中長期計画を示したフィリピン発展5か年計画（Five-Year Philippine Development Plan 1978～1982）を挙げることができよう。能う限り綿密詳細な調査統計資料に基づいて策定されたフィリピン総合発展計画のこの膨大なブループリントのなかに、第3部社会部門第9章保健・栄養・家族計画、第10章教育・マンパワー、第11章住宅、第12章ソーシャルサービス、コミュニティーディベロップメント、という項目のもとに、フィリピンの児童が直面している危機的諸状況の実態と、それからの離脱を目差して進む向こう5年

間の諸手順が提示されているのである。しかもこの大統領令布告の前書の最初に、次は1978年から1988年に至る10か年計画、そして最終的には、紀元2000年を目途とする長期発展計画の策定を宣言しているのである。第4に挙げたフィリピン児童のための10か年包括的国家計画書は、まさにこのような国家総合発展計画中期的展望と照合するものであり、また随所に、紀元2000

年の時点における児童福祉

状況についても厳しい予測を立てているのである。

第6には、この紀元2000年という世紀の転換点を長期計画最終年度として設定し、5年ごとに中・長期展望と行動計画および実施要領の練直しが必然的に行われるように、5年ごとの大統領主催児童育成全国会議の開催を決定していることである。次回第2回会議は、国際児童年国内国外諸活動の評価総括ということも念頭においてか、1980年に開催が予定されている。

フィリピンにおける児童福祉の危機的諸状況

フィリピン共和国の将来が、全人口約4,200万人の56.8%、半数以上を占める児童人口（20歳以下）が、どのような成長発達過程をたどっているかによって左右されることは、世界いずれの国とも同じである。目下のところ、アジア太平洋地域諸国のなかで最貧発展

途上国の一つとされるフィリピンの児童福祉状況は、決して明るいものといえそうもない。

児童人口のうち、10人に1人は5歳に達するまでに死んでいくという一事をとってみても、その一端がうかがえるであろう。以下いくつかの事項について、このような児童福祉をめぐるフィリピンの状況を紙面の許す限り述べてみよう。

(1) 驚くべき貧富の格差

公的機関（フィリピン政府・ガット報告など）の発表によってみても、国民の実に75%が低所得階層とされている。この国の最も貧しい階層の人々に直接かかわっているソーシャルワーカーのみるところは、もっと厳しい。国富の90%を手中にしている上流階層は2%、子弟の中等教育以上の教育に事欠かない中流階層は13%、そして残る80%が貧困階層として把握されている。前記の包括的国家計画書によれば、全国民の30%は最貧困階層として、いわゆる古典的貧困線以下の状態にあるのである。

児童人口10人中わずか4人が、成長発達に不可欠な衣食医などの基本的ニーズにかかわるサービスを満たされているにすぎないという実情は、このような国民大多数の大衆的貧困から、必然的に発生してきているのである。

(2) 栄養不良と病気と乳幼児死亡の連鎖反応

このような貧困の広がりには、フィリピンの児童たちの多くを、貧弱きわまる食事による栄養不良から栄養失調へ、しばしば病気にかかりやすく、そして死亡へと、児童人権の出発点である生存権の危機的状況にまで押しやっけてしまっているのである。

0歳～6歳児の児童人口の26%、7歳～14歳児の8.6

%、つまり0歳～14歳の34.6%の子どもが、ひどい栄養不良・栄養失調に陥っていると報告されている。

フィリピンの国民病とされている結核を初めとする呼吸器系統の病気に、1歳から5歳までの全児童人口の30%が冒されているのである。前記の30%の最貧困階層児童の乳幼児死亡率は、0歳～1歳児で22.4%、1歳～4歳児で14.3%、実に36.7%の児童が5歳になるまでに死んでいくのである。

したがって現時点におけるフィリピンの児童福祉緊急課題の第1は、飢餓・栄養失調・病気からの解放を目差して、各種各級の栄養補給給食プログラム（feeding-program）と、BCGを初めとする各種の強制予防接種（寄生虫駆除を含む）のための全国的ネットワークを、可及的速やかに普及していくことにあるとされているようである。



礼拝堂兼部落集会所を利用した保育所、
ルソン島中西部海岸地帯のネグリト部落

(3) 就学率と中途退学児童青少年問題

7歳から12歳までの小学校義務教育就学率は98%と報告され、意外に高い就学率である。しかし13歳から16歳までの中等学校（現地では4年制のhigh schoolと呼んでいる）就学率は56%と激減する。義務教育化されていないこともその一半の原因であろうが、なんといっても貧困が最大の原因である。アジア発展途上国児童に関する他の調査報告書によれば、小学校課程においても、ましてや中学校課程においてはなおさら、中途退学が30%から50%にも及んでいて、そのことのほうがもっと深刻な児童問題・社会問題であるという指摘がなされている。フィリピンにおいても上記数字は、就学率というより、入進学率の数字であり、中途退学の実情が、故意か偶然かわからないが、上記報告書には統計的数字としては欠落しているようである。

それであれば、児童福祉対策の8つの柱の1つとなっている不就学児童（out-of-school youth）と勤労青少年対策問題が、相関的に深刻な問題として取上げられている事情の説明がつかないであろう。

フィリピン児童福祉推進の8つの柱

フィリピン政府予算中、社会福祉関係支出は、1978年20.6%、1979年25.1%と拡大基調にある。それだけ児童福祉推進にも力を入れようとしているといえよう。しかし社会福祉事業を支える政府の力はまだ弱く、民間社会福祉団体（大半はカトリック系）に大きく依存している。そして公私ともにUNICEFのような国連の資金や、欧米の国際民間児童福祉援助団体からの資金援助によって、その財源のかなりの部分を支えられているのが実状のようである。



子どもたち。不就学児童も多い。

しかしこのレポートの前段で述べたように、政府・民間が全力を挙げて、フィリピン児童の福祉水準向上に突進しようとしている児童福祉関係者の熱意には、胸を打たれるものがある。紙面が盡きたので、大統領府児童福祉委員会が掲げている児童福祉推進8つの柱を列挙して、このレポートを締めくくりにする。

- ① 基礎的強制予防接種の普及確立。
- ② 早期発見予防警戒システムの整備確立。
- ③ 児童措置態勢全国ネットワークの整備確立。
- ④ 青少年非行対策網の整備強化。
- ⑤ 勤労青少年対策網の整備充実。
- ⑥ 国民的価値遺産の検証と継承伝達。
- ⑦ 適時適切な危機的状況への介入システムの整備確立。
- ⑧ 児童人権擁護運動（child advocacy）の展開。

参考文献

- a) The Child and Youth Welfare Code.
- b) National Plan of Action for the Development of Children and Youth.
- c) Five-Year Philippine Development Plan, 1978-1982.
- d) Comprehensive National Programme for the Decade of the Filipino Child, 1977-1987.
- e) Philippine Encyclopedia of Social Work 1977.

タンザニアの子ども

—責任の分担—



すず 鈴 木 優 梨 子

駐タンザニア日本大使館勤務

はじめに

タンザニアは東アフリカに位置し、インド洋に面した広大な国である。面積は日本の2倍半、ニエレレ大統領のもとに、自立を旨とする社会主義的国づくりが進められている。

隣国のケニアは日本でもよく知られているが、タンザニアのことは、地味なお国柄のせいもあるのか、あまり知られていない。しかしキリマンジャロ山やセレンゲッティ平原の名なら、国名よりも知名度が高いと思われる。

首都ダルエスサラーム市を含む海岸地方は高温多湿で、7月と8月は涼しいが、それ以外の月は気温が24℃～35℃もあって蒸暑い。内陸部はキリマンジャロ山ろくのモシ市、アルーシャ市などのように、セーターの要るところもある。

アフリカのいくつかの国にみられる部族問題は、タンザニアにはほとんど存在しない。というのは、120以上の小部族が散在しているため、深刻な利害対立



男の子、村の小学校で

にまで至らないのである。ことばはスワヒリ語が国語であるが、各部族語も使用されている。

多子家庭の子どもたち

各家庭の子どもの数は日本に比べるとはるかに多い。6人とか7人というのはざらである。あるタンザニア人は「子どもが1人か2人の場合、われわれは『あの家には子どもがいない』という。5～6人のときは『少しいる』といい、9人くらい以上いると『あの家には子どもがいる』という……」と言っていたが、これによれば日本のほとんどの家庭は第1のケースに取まってしまうのではなかろうか。

したがって家庭自体が長期にわたる絶好のしつけの場であるとともに、協調精神を培う場となる。開発途上国の例にもれず、就学前教育のための施設はほとんどないが、子どもたちは雄大な自然のなかで木に登ったり、自分で工夫しておもちゃを作ったりして、多人数のなかでもまれながらたくましく育っていく。(そういえば、タンザニアの小学校で、朝礼のときに生徒が卒倒することは、きわめてまれだそうである。)

私の家の隣の家庭（イシェンゴマ家）には、電話局の技師である父親と35歳くらいの母親とのあいだに8男3女、計11人の子どもがいて一日中にぎやかである。

最初は「これではたいへんだらう」と思ったが、5年間付合っただけで気が知れるにつれて、「これならば11人でもやっていけそうだと納得するようになった。なにしろ子どもたちがよく働くのである。長女がご飯を炊く、長男が洗たく物にアイロンをかける、次男が弟たちの運動ぐつをぎぶぎぶ洗う、三男が庭木に水をやる、四男がミルクとパンを買ってくる、次女が部屋の掃除をする、幼ない三女が弟の歩行練習を根気よくみてやる……といったことが、自発的に毎日繰り広げられていく。長男は日本でいえば中三の受験期に当たるときも、毎日2時間くらいは家事を続けたうえ、見事に志望校に合格した。

子どものしつけ

以上は特殊な例ではない。「自分の年齢に相応した仕事を分担して、家庭または共同体のために尽す」という考えかたは、アフリカの伝統社会に深く根を下ろしているのである。ある家に行ったとき、6歳くらいの女児が緊張した顔付きで、紅茶を飲んでいる私の手もとばかりを見詰めていたので、「外人が珍しいのかしら」と言うと、主婦は笑って「このあいだから来客のコップや茶わんを、使用后洗い場まで運ぶ役をこの子に与えたので、あなたが飲み終わった瞬間に運ぶ気なんでしょう」と教えてくれた。

しつけは非常に厳しい。その中心は勤労（課された分担を果すこと）と、年長者へ敬意をはらうことである。ずっとまえのことだが、新聞の投書欄に「われわれ



女子中学校の生徒

れは子どもを厳しくしつけすぎではないだろうか。『どうしてあのムゼー（老人）にあいさつをしなかった！』と父親に厳しくしかられて『したよ、ぼくはシカモー（年長者へのあいさつのことば）と言ったけれど、あのおじさんが聞えなかっただけだよ……』と少年が泣きながら弁明しているといった光景は、われわれの社会ではごくあり触れたことであって、だれでも日に一度くらいは目にすることであろう」という観察で始る投書が載ったことがあった。その「シカモー」も、ただ発音すればいいといったものではない。そのときのタイミング、姿勢、視線のやり場（あらぬ方を向いてただ声だけ出すのも責められる）などに至るまで、いちいち吟味される。

タンザニア人の家族観と新しい問題

タンザニア人は「拡張家族」と呼ばれる、大家族的な血縁のきずなを実体あるいは観念として有している。わかりやすくいえば、次男が急死したとすれば、長男は遺児を自分の子同様に扶養するか、あるいは後見する。「いとこ」という語のある部族語はまれであって、

「いとこ」はほとんどの場合、「兄弟」と同じ語で表される。

したがって伝統社会においては孤児といったものはほとんど存在しなかったが、近代化・都市化、異部族間の結婚などの社会変動を背景に、孤児または近くに面倒をみてくれる人のいない児童の存在が、最近顕在化されはじめた。ダルエスサラーム市の郊外にある、そういう子どもたちを收容する施設「クラシーニ・チルドレンズ・ホーム」を訪れたことがある。母親の死亡、失そうなどによるもの、未婚の母が出産して捨子をしたと思われるケース、親が死んで親類も貧困・老齢・病気などの理由で引取れないケースなど、入園の理由はさまざまであったが、子どもたちはタンザニアの水準をはるかに上回るとされる優れた施設で、楽しそうに暮していた。

しかし政府は今後この種の施設を増設する計画はなく、一時預って、①社会福祉省の努力によって近親者を見つける、②里親をみつける、などの方法で、子どもたちになるべく早い機会に「次の家庭」を与える方針である、とのことだった。

子どもの栄養障害と母親に対する実践的指導

栄養の問題も重要である。タンザニアでは、はしかは命取りの病気として恐れられている。これは、タンザニアのはしかそのものが特に凶悪な性質をもっているわけではなく、母親から受継いだ抵抗力と本人の栄養などによるところが大きいのではないと思われる。そのため村のヘルス・センターの大きな仕事のひとつが栄養指導となる。特に蛋白質不足、鉄分不足、各種ビタミンの不足と糖分の取過ぎがよくみられる。



母と子

しかしこれはなかなか難しい問題であるに違いない。その土地にできない作物を摂取するように指導しても無意味だし、牛乳を飲むように主婦に言うよりも、牛を飼うだけの牧草のない村には、ミルクプラントから村まで通じる道路を造るほうが先決となるだろう。

そう思っているところに、おもしろい施設を見る機会があった。まだ実験的な段階とのことだが、今後この種のセンターがどんどん各州に広まっていくに違いないと思われた。この施設は、キリマンジャロ州にある国立病院付属の栄養センターだという。まず巡回看護婦や村の衛生指導員たちが、重度の栄養障害児（1歳～8歳くらい）を選び出す。その子どもたちが応急治療のため同センターに送り込まれるのは当然としても、おもしろいのはその母親たちもセンターに連れて来られ、翌日から3週間徹底した栄養指導が行われるという点である。母親たちは午前中は栄養学級に出席して理論を学習し、午後は菜園や養豚場、鶏小屋などに散って「チャクラボーラ」（栄養ある食物）の生産実技に励む。これには「児童の栄養障害は、その子どもの問題ではなく、母親の問題であり、母親の食生活観が変ら

ない限り、子どもの治療のみ行っても無意味である」という考え方の裏付けがあるそうである。

3週間後、母親たちは、自分たちがセンターで飼育したひとつがいのうさぎをもらって、子どもと帰村する。うさぎは、これをもとに殖やし、「ほかの肉がないときでもうさぎ肉の蛋白質だけは確保し得る態勢」を、村でつくるため与えられると聞いた、邦人登山客の多いキリマンジャロ山のふもとでそんな試みがささやかに続けられている。

捨子対策センター

タンザニアは、アフリカ大陸の元タンガニーカと、インド洋上のザンジバル島がつくった連合共和国であるが、丁字香（ちょうじこう）の輸出のために比較的財政の豊かなザンジバルには、本土にはない、興味深い捨子対策センターがある。この制度は、人間社会には捨子をするしか道がないほど追いつめられた母親が時おり出現するという現実をひとまず認めたくて、乳児が便所などに捨てられて死亡するといった不幸な事態を避けるために、国が捨子を積極的に引取るシステムである。具体的には、児童施設の一部が捨子用窓口となっており、入口はだれでもはいるが、内部から見えないようになっていて、かごが置いてある。不幸な母親はここにそっと赤ん坊を置いて（見とがめられたり逮捕されたりすることなく）出ていく。いっばう24時間勤務体制の、内部のスタッフは、かごと連動するベルの音を聞きつけるやいなや、出ていって赤子を収容し、整った条件のなかでの養育を開始するわけである。

これは捨子を奨励しているのではないことはもちろん



民芸品の草のざるの編み方を習う

であり、現実には、イスラム教徒が多く、戒律の厳しいザンジバルでは、捨子はあまり見られないと聞くが、このアイデアには興味深いものがある。

むすび

タンザニアの子どもたちは豊かな大自然のなかで、父母の労働を毎日目のあたりにしながら、元気に育っていく。幼児の死亡率が高いこと、医者数が少ないこと、中学校の数が少ないことなど、問題はまだ山積しているが、前述のような試みが独立後いくつかしっかりとこの社会に根を下ろしはじめているのも事実である。

ジュマンネ（火曜日－火曜に生れたのでこの名が付いた）やティバイジュカ（「人はおまえを裏切るかも知れない」の意）やカシゴ（「細い首の男」－祖父のあだ名から）たちは、今日も私の家のそばでフットボールに興じている。

いま元気に遊ぶこの子どもたちが成人して社会の責任を分担しはじめるころ、タンザニアはどう変わっていくだろうか。

ナイジェリアの子ども



みや 崎 やす こ
宮 崎 安 子

九段坂病院小児科医

はじめに

1968年から1972年の間、日本キリスト教海外医療協力会の援助により、主人とともに家族ぐるみで行ったときのことである。そのころ、ナイジェリアは内乱(通称ビアフラ戦争)の戦中戦後にかかっていた。

1回目は西部州の田舎町イレシア、2回目は東部州のオボボに行った。オボボはナイジェリアの人も敬遠するほどの僻地であった。

同じナイジェリアでも、イレシアとオボボでは、使っている言語も宗教も種族も風土も習慣も違っていた。イレシアはヨルバ族で、ヨルバ語を使用、宗教はほとんどがイスラム教、オボボはカラバ族で、エフィック語を使用、宗教はキリスト教が多数を占めていた。

このように同じナイジェリアのなかに、小さな部族までいれると200もの部族があり、言葉も異なっていた。

足かけ4年滞在したが、外国人として見たり聞いたりしたことには限度があり、また7年もまえになるので、現在では少し事情が異なると思う。



ビアフラ戦争の死者で町にもはげたかが増加

そのころ首都ラゴスムはすでに車があふれ、電気も水道もあり、テレビもあり、輸入製品がマーケットに出ていた。

しかし車で30分も飛ばせば、うっそうたる密林に覆われ、一本道は昼間でも暗いほどだった。そこには水道も電気もなかった。昔ながらの土で造られた家があり、昔ながらの習慣に生きている人たちの生活がそこにあった。

土の家は日中の暑さから、夜間の冷え込みから生活を守る。日中は涼しく、夜間は暖かく、気候に合った造りであった。しかし雨季になると、滝のような雨が降続くため、崩れて生き埋めに合うこともあった。

ナイジェリアの子ども

(1) よく働く子ども

どこに行くにも、私たちは水と食物を準備する。あまり遅くならないうちに目的地に着くために、いつも空が白みはじめるころ、午前5時ごろに出発した。夜は泥棒や強盗に襲われることがあり危険だったので、夜間はドライブしなかった。

涼しい朝霧のなかではじめに出合うのは、決して子どもの群だ。はだし・裸の子どもたち、なかにはやっとなら5～6歳になったばかりの子どもも混じっている。みな頭に大きな水がめを載せて一本道の両側を、車を避けながら早足に歩いていた。遊びたい盛りの子どもたちがせっせと働いていた。

水くみの仕事に次いで、もうひとつかれらが朝しなければならぬ仕事は、たきぎ集めである。密林へたきぎを集めにはいる。やはり頭上に、集めたたきぎを載せて家路に急ぐ。

この水くみ、たきぎ集めの仕事は、生やさしいものではない。水くみについては、雨季はそれほどでもないが、乾季になると困難をきわめる。ナイジェリアの乾季は4か月も5か月も一滴の雨もなく、草はすべて枯れ尽し、鼻ものども皮膚も乾燥のためからからになる。川の流れるは細くなり、池の水もだんだん少なくなり、干がたが加わってくる。時には一杯の水を求めて、なんキロも歩いていかなければならないこともある。

たきぎ集めも、はだし・裸の子どもにとっては危険な仕事である。密林のなかには毒じゃ・さそり・大とかげ、その他さまざまの昆虫や動物がいるのでたいへんだ。破傷風菌や寄生虫が土のなかに含まれているから、傷をしないように気をつけなければならない。

(2) 運動神経抜群の子ども

どの部落にも小さな学校・教会・マーケットなどがある。そのなかに必ずあるのが広いコート、そこでは運動神経抜群の青年が炎天下でサッカーをしている。かれらのエネルギー、たくましさを見てると、圧倒される。

ばちんこ（Y字型の木にゴムをつけて石などを弾き

飛ばすおもちゃ）も子どもの一般的な遊びだった。百発百中、得物を捕まえるために必要な技術であるが、みな上手だった。私どもの長男、雅は友達に借りてやらせてもらったが、あまり上手にいかず、いつもうらやましがっていた。

木登りも上手で、わが家の庭に大きなマンゴーの木があったが、かれらはとても上手に登っていた。パパイヤ・バナナ・やしの木の実を採ったりするためにも、木登りは生活に必要な技術である。木登りが上手か下手かに生活がかかっている。その身軽さ、機敏さは、遊びのなかに自然と訓練されていた。

このようにエネルギーあふれる子どもたちの背後に、数多くの赤ちゃんが病いに倒れていることを知ったのは、イレシア病院の小児科の診療を手伝ったときだった。

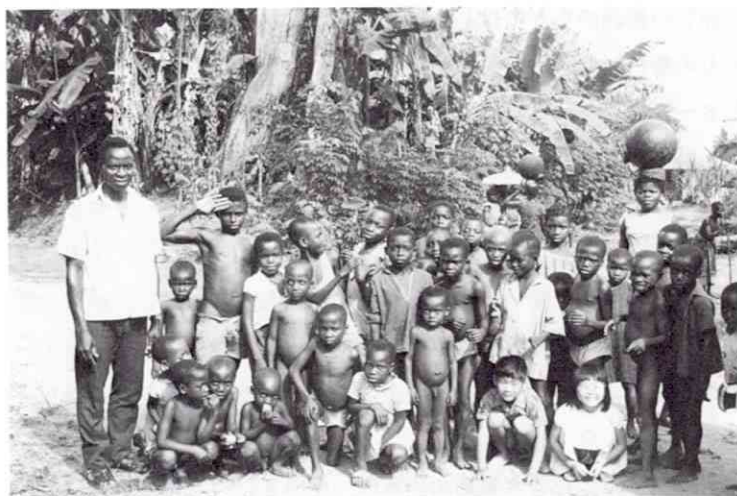
イレシア病院にて

私は主人と子どもの健康管理をするために同伴したのであり、医者として働くつもりでなかった。しかし2歳の長女、4歳の長男が思いもよらず、ナイジェリアの気候に慣れ、膚も言葉も違う人たちに慣れたこと、すでに働いている主人から、病院、特に小児科が忙しく、小児科医はイギリス人の若い女医さん1人だけで、夜も昼もなく働き続けていることを知って、私でも役に立つことがあればと手伝いはじめたことが働く発端になった。

小児科がなぜそんなに忙しいのか。それは5歳以下の医療費が無料だったからだ。イレシア病院では5歳以下ならば、お金がないために断られることはないのだ。金持も貧しい人も平等に医療が受けられる。

小児科の外来は1日に300人、時に685人に及んだこともあった。小児科の病棟は60床あり、いつも満床だった。1年間の入院患者数は2,889人、そのうち死亡児は455人、15.7%の死亡率を示していた。

どんな病気で入院していたか、そのころの記録¹²⁾をみると、①下痢、②肺炎、結核、③麻疹、④貧血、⑤原因不明の発熱、⑥栄養障害、⑦感染症、⑧百日咳、⑨脳脊(せき)髄膜炎、⑩骨折、である。1人で3つも4つも病気をもっている子どももいた。



子どもたち、前列右の2人が筆者の子

栄養障害について

お産に際しておかあさんが死亡したとき、双生児・三つ児の赤ちゃんが生まれたとき、母乳が出なくなったとき、離乳がまだ始っていないときに次の赤ちゃんが生まれたとき、などは栄養失調になる。なぜならば日本のように牛乳がない、粉乳が高価で買えない、それに代る蛋白質源に乏しいからだ。赤ちゃんにとって母乳がないことは、死を意味する。

そのうえヨルバ族³⁾は礼儀作法、身なりに重点がおかれ、食べることにはあまり注意が払われなかった。回教徒の社会は男尊女卑であり、食べるものも、父・長男が先においしいものを食べる、最後に子どもの食べるころには、かすのようなでんぷん食物のみとなる。

そのうえいろいろの習慣があり、食生活に制約を受ける。そのひとつの例として、卵を食べることを勧めると、「卵を食べると泥棒になると禁じられています」という答が返ってくる。はじめ私はナンセンスと一笑

に付したが、その後、私どももナイジェリア流に鶏を飼い、卵を食べると泥棒になるという気持ちがよくわかってきた。

ナイジェリアでは鶏もやぎも豚も放し飼いにする。動物は自由にみみずやかえるをつついたり、野草の種や葉、バナナの皮やその他料理に使ったかすなどを食べる。不思議に夜になると飼い主の家にもどってくる。鶏にとって外は危険がいっぱい、へび・たか・ねずみ、その他の動物にねらわれている。鶏は人間をいちばん信頼し、大切な卵も居間の片隅に産み、卵を温めてひなをかえす。その信頼を裏切って卵を取って食べるなど、とてもできないことになる。

高価な粉乳を買い、プラスチックのほ乳びんで飲ませることに、問題があった。水が十分でないところで、ほ乳ビンをきれいに洗うことは難しいし、粉乳があまりにも高価なので飲残しを捨てることができず、次のほ乳にそのまま使用してしまう。熱帯地方で日中は、冷蔵庫がなければ腐敗してしまう。診察中に持つ

ていたおかあさんのほ乳びんのなかのミルクが、腐敗して酸臭を発していたことがある。

人工栄養について指導するとともに、祖母の乳首を吸わせることを勧めていた。吸わせているうちにホルモンの働きが盛んになるのかどうかしらないが、その祖母の乳房から乳が分泌してくる。もちろん量的にも質的にも十分とはいえない。

離乳時に使われるものは日本の「くず湯」のようなもので、砂糖を加え、熱湯を注いでできあがる、パフパフというものである。ほとんどがでんぷんなので、蛋白質欠乏症（クワシオコール）が起ってしまう。

1975年のTheodore Kayの報告³⁾によると、このパフパフのなかに大豆粉を混ぜることで、栄養失調を防止するのに成功したとある。大豆は非常に安く、また容易に作れるので、この方法が浸透すれば、クワシオコールも少なくなっていくのではないかと思われる。

弱いものに対する思いやり

「卵を食べると泥棒になる」という習慣のなかにも現れているが、生活はとても貧しいが、心は温かく、思いやりのある人々だった。

小児科の外来で、よく重症の患者のなかに混じって、重症心身障害児の赤ちゃんを見かけた。福祉施設がほとんどないナイジェリアでは、この子どもはどのように扱われて育っていくか心配だった。

日本ならば結婚できないようなハンディキャップをもった母親が、祖母に助けられながら、診療に赤ちゃんを連れてきた。しばしば見かけたので婦長に尋ねると、「回教徒の人は奥さんをなん人ももってもいい。しかしそのなかに体の不自由な人を1人でももつと、天国

に行けるといわれている」とのことだった。体の不自由な人たちに親切にすることは、天国行きの切符が買えるほど良いことになっている。

私どもと親しく家族ぐるみで交際していた方の家のことであるが、子どもさんが4人いた。ところがその1人は戦争孤児だという。戦争中、戦火を逃けているときに親にはぐれてしまったこの子がかわいそうなので、自分の子どもと一緒に育てているとのことだった。いとも当り前のように話してくれたが、明日がわからないとき、食糧も十分でなく自分の子どもたちが飢えるかもしれないときに、見ず知らずの孤児を自分の子どもとして育てることは、なまやさしいことではない。

まとめ

ナイジェリアのオポポではひと口の冷たい水がどんなに貴重だったか、ひと口の冷たい水を感謝と喜びで味わったものだった。

日本では福祉施設がふえてきているが、私たちは心身障害をもっている人々を、ナイジェリアの人たちのように温かい心で見守ってあげているだろうか。また自分の家庭さえよければよいという気持ちばかりで、他の人たちのことを自分のこととしてとらえているだろうか。

今、私たちは豊かさに慣れてしまい、物に対する感謝の気持ちが薄れてしまっている。しかし現在でも、世界には8億もの人たちが、貧しさと飢えと病気にさらされていることを忘れてはならないと思う。

- 1) 宮崎亮：密林の生と死と愛、新教出版社刊。
- 2) 宮崎亮・宮崎安子：ナイジェリア辺地における医療、(1)2(3)、医学のあゆみ、第10号、昭和46年3月。
- 3) Kay, Theodore: ナイジェリアにおける大豆の普及と蛋白質欠乏症 (Kwashiorkor) の予防、臨床栄養、第48巻第1号、昭和51年1月。

レバノンの 家庭生活と子ども



小山則子
元 在ベイルート

はじめに

私ども一家が主人の勤務に伴ってレバノンのベイルートに着いて、もう10年という歳月がたった。

その当時、中東という言葉は耳にする機会も少なく、ましてレバノンという国は「遠い国」そのものであった。

今、中東の国々が世界中の注目を浴び、私たちにも石油資源の問題で身近に感じられる国になったが、10年前には考えられないことであった。私が過した1968年末から1970年末までの2年間は、時々起る中東紛争などがあったとはいえ、ベイルートではともかく平和に楽しく暮すことができた。で、これから書くことは当時の平和なレバノンの姿であって、3年前の20か月に及ぶ激しい内戦後、ベイルートがどのように変わってしまったかは想像がつかない。家族ぐるみで親しくしていた友人・知人たちがヨーロッパへ逃れたとか、行方不明になったとか、殺害されたのではないかという話を聞くにつけて心が痛む。

レバノンの風土

レバノン（共和国）は、面積でいえばちょうど岐阜県くらいの小国で、人口約300万人前後といわれていた。西は地中海に面し、北と東はシリア、南はイスラエルに接している。地中海に面した細長い海岸地帯は、温暖で肥えた平地が多く、オレンジやグレープフルーツなど、数多くの果実が豊かに実る。海岸地帯に併行して走る高さ平均約2,000 mの山岳地帯は、冬は酷寒で3～4か月も雪をいただき、中東では珍しくスキーができる。レバノンという国名は、アラム語のラバン「白」に由来しているといわれる。周りの熱い砂ばくの国々に比べ、「中東のスイス」と呼ばれるほど、良い気候条件とすばらしい風景に恵まれている。

首都ベイルートは、東のアジアと西のヨーロッパをつなぎ、また南のアラビアとエジプトを東西につなぐ十字路であり、地中海を介すれば、西欧・アジア・中東をつなぐ窓であるという地理的条件をもっている。そのため「中東の窓」ともいわれている。

四季のないこの国は、夏と冬しかなく、私どもは12月末に着いたが、ちょうど冬の雨期に当り、時おり降る激しい横なぐりの雨や、雷に驚かされた。雨期の1月・2月が過ぎ、3月の末ごろ、突然暑い日がやってくる。それまで着ていた上衣を脱ぎ、半そでのブラウス姿になると、その日から夏になるのである。アパートのベランダからながめる空は、来る日も来る日も真っ青で、雲ひとつなく晴れわたる。紺青色をした地中海は穏やかに波ひとつない。半年以上も続く夏にあきあきして11月にはいると、ある日、突然激しく雨が降る日があり、その日から上衣を着なくてはならない寒さになり、まさしく冬になってしまう。



露天のパン屋

ベイルートの街

ベイルートの街は少し突出た形で、二方が地中海に臨んでいる。海岸地帯には超高級ホテルやビルが立並び、目抜き通りには、ヨーロッパから直輸入の流行の服装品がウインドーを飾り、またモダンなカフェテリアやレストラン・宝飾店・映画館が軒を並べている。

街を歩く娘たちは、当時流行の最先端をいく超ミニ姿であった。色白のかの女たちの好んで着るのは、鮮やかなオレンジ色・グリーン色で、澄みきった青い空や海の色と調和して映えていた。いっぽう下町といわれる一帯には、貧しい身なりの労働者や、周辺の国々からやってきたと思われる色の黒いアラブ人や、黒いベールをかぶった婦人たちの姿が多くなった。

3月～10月の暑い日は、海に真っ赤な夕日の沈む時間になると、海岸通りは若い人たちや子どもを大ぜい連れた家族でにぎわう。アイスクリームの屋台や、さくらんぼ・オレンジ・マンゴーなどの搾りたのジュースを飲ませる屋台などが出て、まるでお祭りのようである。

宗教と生活

レバノンには宗教にも独得なものを生み出している。イスラム教国かと思っていたがそうではなく、公認されている宗教だけでも10以上あるといわれているくらいで、宗教が複雑に入組んだ国である。そこでレバノンは宗教史の生きた博物館ともいわれているほどである。キリスト教徒が過半数を占めており、4つのキリスト教と、3つのイスラム教が、主な宗派として存在している。宗教は国民生活の末端に至るまで深く食込んでおり、人々は自分がキリスト教徒か、イスラム教徒か、ユダヤ教徒か、そして各々の宗教のどの宗派に属しているかを明記したカードを持っている。そしてこのことが、結婚・離婚・相続・養子縁組などの社会生活すべてに関係するのである。

日常生活と宗教との関係のひとつの例としては、国民の祝日が1年に25日もある。これは各宗教・宗派に顔を立てた宗教祝日なのである。キリスト教のイースターは2度もあり、子どもの学校がその都度休日になったりして驚いたが、宗派によって少し日がずれるということの結果なのである。

政治の面でも、大統領はマロン派キリスト教徒から、首相はスンニ派イスラム教徒からというように、大臣も各宗教・宗派で分けられているのである。私は現地の人たちから、私の宗教についていろいろ聞かれるたびに、今まであまり考えてもみなかったことのない宗教について、改めて考えさせられ、宗教の強さというものを感じた。

家族

レバノン人は大家族主義といわれるほど、日常の生



ベイルート市街

活が家族を中心になされている面がみられる。この家族のあいだに結ばれている愛情の深さと、相互の尊敬と、家の伝統という強いきずなのために、個人の生活をあえて犠牲にすることも時々ある。代々続いている家柄・家名や伝統を重んじる傾向は、古い社会に残っており、家族の名声や評判は、その家族の各々にとって大きな意味がある。現在でも都市を除いて多くの村では、親子3代が一緒に生活するといった、大家族主義が行われている。それも男性中心の、年長者を尊敬し重んじる生活が行われている。極端な場合、ある村は同宗教の同宗派の人で結ばれていて、ほとんどの人が姻戚関係になっており、祖先は結局この村の創設者につながるということもある。

ベイルートなどの都市では、夫と妻・子どもだけで生活する人が多くなり、自分たちの生活のプライバシーが求められるようになってきた。しかし夫の家族や親類とのつながりはやはり深く、互いの事情に通じ合うように心がけ、できるだけ多くの機会を得て訪問し合っているようである。休日になん台もの車を運ね、近くの山や海岸へ出かけ、大きな輪を作って楽しそう

に食事をしている光景を、私どももしょつ中見ることができた。

子だくさん

レバノン人は子だくさんであり、子どもを愛し、大切に育てている。家名や伝統を守り続ける人は、子どもの誕生に、男の子を望んでいる。最近になって、男性と女性の地位同等の認識がようやくなされはじめてきてはいるものの、一般には男児の誕生がみんなに祝福されている。殊に村にはこの習慣が残っていて、村人たち一同で母親を祝福し、贈物をあげる。家では男児誕生を祝して作る伝統的な食物を準備し、それを、先祖代々の家名を継ぎ伝える男児を恵んでくれた神への感謝のしるしとして、親類・近隣に届ける。

レバノン人が信じている多くの宗教が賛成していないので、避妊は非常に現代的な人を除いて行われていない。そのためか7~8人、あるいは10人くらいの子だくさんの人が多くいる。

出産は都市では病院でする人が多くなり、大学病院のように、患者の支払能力によって診察料を取るところもある。お産のあいだは、そばにいて慰めてくれる親類の婦人を1人か2人連れていく習慣があり、産婦の周りにはにぎやかである。家での出産を好む人もいて、その場合はお産婆さんがとりあげる。貧しい階層の人には無料の診療所があり、病院で出産できるようになっている。栄養不良の赤ちゃんには、無料のミルクも支給される。

赤ちゃんはできるだけ母乳で育てる。最近では離乳が早くなってきたとのことだが、少しまえまでは男の子は2歳くらいまで、女の子は1歳くらいまで、母乳を

飲ませていたそうである。レバノンの習慣では、生れた赤ちゃんはゆりかごで育てられる。きょうだいの多い場合は、兄や姉がゆりかごを揺すって、歌であやしている。

子どもの名前については、名付ける伝統的方法も残っていて、長男は祖父の名をもらっていた。故人になったおばやおじの名前を付けることも多く、家族のなかにいつまでも名前がとどまっている。聖人の名前を付けることもあり、また生れた日がクリスマスなら、アラブ語のクリスマスに当る名前になることもある。ほとんどのアラブの名前は意味をもつので、両親がどんな特性を望むかで、命名が考えられる。

子宝に恵れている人は、休日になると、10人近くの子どもを1台の車に乗せてドライブに出かける。子どもたちの頭ではみ出しそうになっている車のなかは、大きな声で歌ったり、はしゃいだり、それはそれは陽気で楽しそうである。私どもは車になん人乗っているかと、楽しみながら数えたものであった。

学校と幼稚園

学校は公立学校、私立学校、女性団体や教会の団体で運営されている学校などいろいろある。これにもやはり宗教・宗派の特色が伴っている。

それに加えて主要な外国人向けの学校、アメリカンスクール、ブリティッシュスクール、フランス系ミッションスクール、イタリアンスクール、ジャーマンスクール、トルコ系スクールなどいろいろある。これらの学校は必ずしも自国の人々だけに限定しないで、門戸を広く開放している。私も子どもを、当初日本人学校が未開校であったので、イタリアンスクール（英語



小学校の学芸会、ベイルート

セクション)に入学させた。狭い町に数多くの学校があるため、朝はなん台ものスクールバスの走回る光景が見られた。

幼稚園も町では非常に普及している。幼稚園には、2～3歳児のはいれるナーサリースクール（保育所）も付設されていた。

幼稚園のなかには遊び道具やおもちゃがほとんどなく、遊ぶことよりも、小学校への準備教育が主という感じの所もあった。私の子どもの通っていた幼稚園では、アラブ語・英語・フランス語の授業をし、簡単な足し算・引き算・掛け算までやっていた。毎朝、幼稚園の袋のなかにクッキーと三角ジュースのおやつを入れたのを持って出かけ、昼には家に帰ってゆっくりと昼食を食べる。午後は1時半ころから、ノートだけを持って出かけ、授業を本格的に受けてくるという形であった。

家に帰って子どもたちは暗くなるまで外で過ごし、サッカーや鬼ごっこ、マール遊び、石けりなどをして遊ぶ。夜は簡単な食事のあと、早い時間に寝かせられてしまう。

ベトナム ホーチミン市の保育問題



NGUYEN THI LIEN HOA

グエン・ティ・リエン・ホア
東京都立大学大学院生

はじめに

ベトナム戦争中、南ベトナムの社会は日本人が想像する以上に混乱していた。首都サイゴンには多くのこじき・孤児・売春婦がいた。子どもの麻薬使用や、14、5歳の少年の集団暴行など、青少年犯罪の記事がしばしば新聞種になった。

孤児と捨てられた混血児がたくさんいた。あるレストランで客の食べたベトナムの牛肉入りうどんの、残



保育所で

りスープに、すぐさま5、6人の骨と皮ばかりの子どもが群がり、それを争ってあさった光景を、私は未だにはっきり覚えている。

1975年、サイゴン市はホーチミン市と改名された。その後、ホーチミン市では社会の環境があらゆる方面にわたって改善された。私は幼児教育を学んでいるので、保育についてホーチミン市の変化の状況を述べたいと思う。

旧サイゴン市の状況

元の南ベトナムには公立の保育所と幼稚園はひとつもなかった。大都市にはいくつかの私立幼稚園があったが、料金が高く、普通の人の給料と同じくらいかかるため、閣僚・将校の子弟、上流階層の子どもしかはいれなかった。

その私立幼稚園では3歳から5歳までの子どもを收容し、8時から11時30分まで午前中だけ教育をしていた。幼稚園の設備は悪かった。楽器もないし、固定遊具もおもちゃも教材もなかった。幼稚園は子どもをフランス語小学校または英語小学校に入れるために、仏会話と英会話を教えることを主な内容としていた。

当時の南ベトナムには幼児教育という学問がなかった。幼稚園教師の養成課程がなく、英語とかフランス語とかが話せれば、だれでも幼稚園教師の仕事に就くことができた。

したがって幼稚園に勤めている教師でも、児童心理とか児童の発達とか音楽とか保健とかの知識に乏しかった。幼稚園で先生は自己流に子どもと遊んだり、英会話を教えたり、英・仏の童話を教えたりしていた。そのような教育方法は子どもの身体と精神を全面的に

発達させるという教育効果を期待するよりも、むしろ形式的生活をより重視した。

ホーチミン市の保育問題

(1) 統計に基づく変化の状況

子どものために保育所を建設することは、政府の緊急な対策となった。南ベトナムでは、大都市から田舎、山岳地帯に至るまで、保育所が建設された。特にホーチミン市は人口が多いので、保育所の建設はなによりも優先させるべきことであった。ホーチミン市の市民



自由遊びの時間

が初めて保育所という言葉に触れたときから1978年までのあいだに、保育問題は次のように発展した。

1978年	数	前年比
保育所数	500	143 %
収容児数	57,000	145 %
保母数	2,833	206 %

そのほか3歳以上の子どものために幼稚園も設けられた。保育所も幼稚園も、保育内容は

違うが、保育時間は同じである。

(2) 保育所の建物と設備

ベトナムにおいて保育所としての条件は、建物が広



保育風景

く、庭があり、静かな場所で、年齢によって別々の部屋があることである。ホーチミン市内で保育所としての条件を備えた建物は、幸い豊富にあった。国外に亡命した旧閣僚や将校の邸宅が充てられた。どれも立派なものであった。

しかし保育所の設備は足りない。ピアノのような楽器がないので、保母はハーモニカで子どもに音楽を教えている。遊具やおもちゃも乏しく、保母は自分で教材やおもちゃを作らなければならない。

ベトナムでは食品・衣類・学用品などは、保育所に優先的に配給している。だからベトナムは発展途上国であっても、子どもの権利をしっかり守っているものと思う。

(3) 保母の養成

保育所の発展に連れて保母の養成が必要となる。訓練された正式の保母になるには、中学校を卒業し、保母学校で3年間幼児教育について勉強する。しかし実情ではそのほかに1か月・3か月・4か月・6か月・1年の速成課程を出た保母もいる。そのため、それらの保母の業務を改善する目的で、なん回も研修課程を



保育所で

開き、理論的・実践的な知識を補充している。

そのほか保育所で働く調理員と保育所管理職を養成する課程もある。

現在は国内事情によって、ホーチミン市の保母は速成教育で養成された若い人が多い。それにもかかわらずかの女たちは子どもに深い愛情をもって、自己の任務達成に熱心に努力している。また業務能力もある。

(4) 保育の内容

ベトナムでは保育所も幼稚園も8時間保育である。

保育所は子どもの身体の発達や知能の発達に合せ、年齢によって3グループに分けて保育している。1歳の乳児グループでは寝返りとはいはいを練習させ、2歳児では言葉であいさつさせ、小・大便を知らせるように練習させる。3歳児では歌・踊り・話・体操をさせ、自分で着替え、また鼻や顔をふかせる。

幼稚園では子どもが24のアルファベットを習ったり、手芸をしたり、衛生的な生活をする習慣を身につけさせたりする。保母は子どもに絵を描かせたり、歌を歌わせたり、踊らせたり、物語を聞かせたりする。そのほか保母は子どもを連れて、散歩したり、自然の風景を観察したり、ゲームをしたりする。

園での生活リズムは、子どもが順応できるように豊かで無理のない内容になっている。保育の目標は子どもが集団のなかで協力・努力する心を育て、互いに慈しみ合い、譲り合う気持ちを持ち、勇敢・誠実などの人格を身につけるようにすることである。同時に子どもの知的要求に応じて文字・数字・音楽などの知識を与えている。

栄養問題にも注意が払われている。保育所での給食は、子どもの成長に合せて、5段階の制度になってい

る。2か月から5か月までの乳児には牛乳、6か月から満1歳児には離乳食、1歳から1歳半児にはおかゆ、1歳7か月から2歳児には米の軟らかいご飯、2歳以上の幼児にはおとなと同じ普通のご飯を与える。子どもは保育所で昼食を食べる。昼寝のあとに、楽しみなおやつが出る。

子どもの健康管理にも関心が払われており、定期的に健康診断と身体測定が行われる。そのうえ保母と親との関係が密接であり、懇談会で子どもの発育状態、育て方、しつけ方について意見が交換される。母親のためには、科学的な保育方法を書いている新聞や雑誌が配られる。

上記のような保育所や幼稚園のほかに、長時間保育する保育所もある。両親が仕事でやむをえず地方へ行かなければならない場合のために、24時間保育の保育所が建設された。しかし政府は子どもが両親と一緒に生活することができるように、勤務時間・勤務場所を



父母の出迎え風景

整える努力を行っている。また両親の都合によっては、昼食と夕食を給食する保育所もある。

保育所と幼稚園が日増しにふえているばかりでない。童謡が作られたり、遊具やおもちゃなどの教材を生産する軽工業も開発されてきている。

おわりに

ベトナムは30年間の戦争が終ったばかりである。ベトナムが統一された社会主義共和国になって、4年がたった。統一された4年間、毎年、天災や洪水があり、民衆の生活は実際に苦しくなっている。毎日の食事には、米に芋やとうもろこしやタピオカなどを混ぜて食べなければならないほど、物質的に乏しい暮らしを送っている。それにもかかわらず保育所・幼稚園・児童福祉施設は急速にふえた。それゆえにわれわれは子孫の世代が、物質的に豊かな環境、精神的に高貴な理想をもった生活のできることを確信している。子どもが心に豊かな芽をもち、将来、社会のために花を咲かせることができるように、われわれベトナム人は、全力を挙げているのである。



輪なげ

韓国の児童福祉と教育



帆 足 喜 与 子

川村短期大学教授

児童福祉の沿革

韓国の児童福祉の歴史は三国時代に始る。しかしそれが目立って制度化されたのは、西暦1783年、李朝第22代正祖王7年に、字恤典則といわれる遺棄および浮浪こじき児童保護法令が実施されたことによる。

李朝末葉、高宗25年（1888年）3月に、仏蘭西（フランス）教会によりソウルに天主教会孤児院が設置されて以後は、多くの民間人によって孤児院事業と託児所事業が発展してきた。

これは韓国における児童福祉事業について、このたび筆者が、国際 Y's Men's Club 韓国地区慶北東地方長で、慶州・愛郷子どもの家園長、白成鎬氏からうかがったものの一部である。

日本で児童保護に関して最初に発動された法は、元禄3年（1690年）10月の捨子禁止である。児童福祉事業の芽生えは、韓国で上述のごとく三国時代にあるのに対応して、私たちが、たとえば、光明皇后の社会的な仕事の話の話を聞かされてきている。

慶州・愛郷子どもの家

韓国の保育所は子どもの家と呼ばれ、1978年現在、全国に606か所あり、収容人員は41,600人とのことである。

幼稚園については、残念ながらわしい統計的な数字を得ていない。

韓国の児童福祉施設の一例として、筆者が今夏訪問した愛郷子どもの家について紹介してみよう。日本と近い国であり、日本の影響が大きいと聞いている韓国の保育施設は、形も機能もわが国とよく似ていて、ふと自分の国にいるような錯覚に陥る瞬間がある。なかにはいる人間のおとなも子どもも、顔も気持もが日本人とよく似ているので融け込める。

愛郷子どもの家の教育方針を少し書いてみよう。

園訓：

良(善)い子ども、健康な子ども、かわいい子ども、
子母訓（親の心得の意のようである）：

食生活改善、子女を立派に養育する、貯蓄を励行、
師訓：

奉仕する教師、実力ある教師、愛する教師。



母と子、愛郷子どもの家



恥ずかしがった女の子。慶州・愛郷子どもの家

保育日数は年300日を限度とし、毎日8時間以上(土曜日4時間)でやっている。

子どもの家も以前は、貧窮・共かせぎ、母が妊娠中の子を預ったが、韓国の生活程度が上がったので、相当裕福な家でも、母が社会で活躍している場合は預る。家庭の生活程度の差からくる、園内での子ども同士のアンバランスを、うまく処理できるようにいろいろ心がけているようである。

保育方針(一部省略)：

子ども個々の特性を検討し、各子どもにふさわしい保育のために特訓指導部署として、歌唱部・絵画部・創作部・舞踊部・楽隊部・演劇部などをおく。

本園を2個班に分け、就学班と未就学班にする。就学班には、小学校就学準備のため、知能発達を図って、年に6冊の本、絵の勉強本1冊、工作の勉強本1冊を基

本的に学ばせる。未就学班には、情緒教育のための基本的な保育を実施する。

日課：

9：00-10：00 遊び。

10：00-11：00 整理・視診・出席確認・貯金、今日のニュース、今日の保育題目。

11：00-11：20 遊び・間食。

11：20-12：00 生活・知能・保育。

12：00-13：30 点心食事・遊び。

13：30-14：30 芸能・生活・昼寝。

14：30-14：40 遊び。

14：40-15：00 間食。

15：00-15：50 ゲーム・幻燈・手工・見学。

15：50-16：00 遊び。

16：10-17：00 特別活動、グループ指導。

17：00 帰宅。

道德教育：

おとなへのあいさつ、順番を守る、公共的利用に必要な観念、交通秩序を守ること、悪いことばを使用しないこと。

見学・展示：

年間、動物園・子ども科学センター・消防署・新羅(しらぎ)文化祭などの見学がある。年4回絵の展示会、年3回絵の大会参加などのこともある。特に本園では、

園長先生が絵画による情緒教育に深い関心をもって研究されている。

子どもと母親

園の教育的輪郭は大よそこのようである。園児たちは人懐こくてかわいらしい。私がカメラを向けると、撮ってもらいたくて、レンズの延長方向にどっと寄ってくる。ことばができたら皆さんとどんなにかたくさん話すことがあるだろうにと、それがもどかしい。

白園長先生も言っておられたが、最低の基本方針を掲げて(保育室に絵や字で示してある)、それ以上はわんぱくを気にかけず、自由にさせている。父兄からいろいろ言われたりするが、発達を重視しているとのお話であった。

筆者は今回と昨年、韓国で母子関係の実験を行った。これは3種類の簡単な、しかし年齢よりは多少難しい作業を3～4歳の子どもにさせて、傍らにいる母親がどのように反応するかをみる。そして母の言動と子どもの言動が、どのように関連し合っているかをみるのである。

この実験は日本とアメリカで行われているが、ひと口にいて韓国のおかあさま方は、少なくとも幼児に対して教育を焦せらず、先回りして期待したり、指図しすぎたり、ということはあまりしないようである。子どもの気持をゆっくり、のんびり包んでいるようにみえる。

ぶらんこに乗っている女の子の写真は、写真を撮って欲しいと寄ってきた群から離れて2,3人いるところにカメラを向けたものである。その恥じらいがまた好ましかった。



ナザレ園保育所の先生方と筆者

ナザレ園の日本女性ホーム

この愛郷子どもの家はキリスト教主義の園である。もう一つ、同じくキリスト教に基づく慶州のナザレ園という社会福祉法人を見学させていただいた。ここの常務理事の禹洗榮先生も、キリスト教精神をもって献身的にナザレ園の運営に当っておられる。ここには保育所もあるが、その他の福祉施設があり、私は次の所、日本女性を収容しているホームを、禹先生のご案内で訪問した。

日本人の女性で平均60歳の年配の方たちが、韓国にも日本にも身寄りがなくなって、ここに収容されているのである。韓国人の夫に死に別れたとか、韓国人の男性について親族の反対を押切って日本からやってきたら、こちらに本妻がいて日本に帰るに帰られなくなったとか、寂しい境遇の人たちが、園のお陰で小ざれいに住まわせてもらっているのである。

本報告の主題は子どもであるけれども、同じ福祉に関する問題として、今いったような立場の日本女性が韓国の方々の温かいお世話を受けていることを、感謝の気持と同時に、責任のようなものを感じてご報告す

る次第である。

儒教とキリスト教

韓国にはキリスト教を信奉する方が多い。昨年10月残念なことに亡くなられた、私が懇意であった釜山幼稚園の李東姫女史も、キリスト教の信者であられた。

この国で仏教は、高麗(こうらい)時代に山中にこもってしまい、一般人の生活から遠ざかり、その代りに儒教が取上げられて、人々の心を律するようになった。いっぽう李朝となって、新たにキリスト教がはいり、宗教として人々の心をとらえ、その傾向が今日まで続いている。この点、仏教が常に日本人の生活とともにあったのと、近隣国同士ながら大へんに違うところなのである。

だから韓国では、日本よりも儒教道徳的な精神が感じられる。その一面、日本よりもバタ臭いふんい気が人々の言葉や考えのなかに時おり現れるのは、キリスト教を介して、西欧的なものが精神のなかにはいり込んでいるのだと思う。事実、キリスト教信者は韓国のほうが日本よりもはるかに多いそうである。

李先生と子どもたち

今回、禹先生・白先生の一方ならぬご好意により、韓国の児童福祉ならびに社会福祉事業の一端をのぞかせていただいた。

ところで私は、一昨年、昨年にも韓国を訪れている。一昨年は幼稚園の先生方の夏季講習会に出て、お話をして先生方のふんい気に触れた。昨年は釜山幼稚園の李東姫先生の保育を見せていただいた。

今年の愛郷子どもの家では保育の実際は見えていない



子どもの作品コレクションと李先生

ので、李女史のものだけが韓国で見た実際の保育活動である。(私はいつも夏休みに行くのでこのようなことになる。)今は亡き先生を追悼する気持をもって数行を加えたい。

女史の保育が自然で生き生きと子どもをとらえ、あたかもかれらをおのずから操るようなエレガントさのあったのは印象的であった。李先生がピアノを弾くと、その音は高く空間に盛上がるように響く。ふとその弾く手をやめて、この60歳の先生が身軽にさりげなく床のうえに座る。すると子どもたちはさっと波のように、先生を頂点としてすそ広がり集ってきて座る。次に先生と園児との話合いが、ごく自然に発展していくのである。

子どもたちははしゃいだり、むりにうれしそうな顔もしないけれど、静かななかに限りなく平和で満足そうに見えた。

韓国の保育にも多分、どこにもあるように足りないところはあろうが、李先生に代表されるたくまざる伸びやかさ、静かな優しさがたたえられているだろう、と想像するのである。

フランスの子ども

—育児と教育—



寺内 礼治郎

中央大学教授

フランスの子ども

西ドイツ、イタリアあるいはスペインに行くと、フランスにもどったときいつも感じたのは、子どもの姿を通りで見かけないことであつた。他の国に比べて、子どもの数が少ないのではない。それでいて、通りで群をなして遊んでいる姿を見かけることは、本当にまれなのである。スペインでもドイツでもよく夜遅くまで、子どもたちが通りで遊んでいる姿を見かけたものであつた。私が住んでいたパリ西北のアニエール市でも、子ども特有のかん声や叫び声を耳にすることはほとんどなかった。通りが子どもの声でちょっとやかましいな、と思うと、必ず通りの両側に立並ぶアパルトマン群の窓がいくつか開いて、おとなのどなり声が聞えてくる。「静かにしろ」、「やかましい」、「あっちへ行け」。子どもの生活空間が非常にせばめられている感じがしたものである。

それだけではない。デパートやレストランに出かけても、幼児以上の子どもを同伴している親たちの姿を



エコルマテルネルで、『今日のエコルマテルネル』所載

あまり見かけない。たまにレストランで子どもが親と同席していても、両親は子どもの存在など一向に気にかけない。ふたりで勝手におしゃべりを楽しんでいる。子どもは両親のやりとりを見ながら、黙って食事を口に運んでいる。

フランス人とかなり親密な関係になると、かれらはきまって家族同伴で夕食の招待をしてくれる。あらかじめ私たちの子どもの年齢を聞いておいて、年齢相応の子どもを話し相手に用意して待っていてくれる。自分の子どもだけでなく、親類の子ども、近所の子ども

の場合もある。子ども同士で遊べるように気を配ってくれる。そしておとなはおとなだけでおしゃべりに興じる。フランスの夕食は日本に比べて遅く、招かれる時刻は午後8時から8時半である。その家を辞するのはいつも1～2時を過ぎてしまう。子どもがソファで寝てしまっても一向に気にしないし、また失礼でもない。話のきりがつくまでは帰ることもできないのである。ここでは、子どもの世界とおとなの世界は、完全に分離されており、「おとなの世界」主導型の社会なのである。

保育施設

フランスでは、働く女性の存在は今では至極当たり前のことである。若い女性だけではない、中・高年層の就業人口はかなり高くなっている。朝、メトロやバスに乗ると、さまざまな年齢層の女性が乗車していることに気付く。日本のように若い女性だけということはない。ひと昔まえまでは、フランスの女性は日本同様、家庭にとどまり、家事・雑用に追われていたといわれる。パリ大学の某教授は言う、「この傾向は高度成長の始った10数年前から特に著しい。パリ郊外に大団地がちょうど造成され始められたときに当る」。慢性的な経済不況のなかで、物価高にあえぎながら、共働きをせざるを得ない家庭が増加していることは事実である。現在、パリでは親子4人で5,000フラン(25万円前後)が1か月当りの生活費として必要だといわれている。2,000フラン(10万円)～3,000フラン(15万円)の月収が大部分の庶民にあっては、共に働かなくては生活を維持することが困難となる。

まだ月が輝き、自動車やバスがライトをつけて疾走



ブローニュの児童遊園、パリ

している午前7時まえ(秋から冬にかけてパリの日の出は遅く、9時近くならないと太陽が昇らない)に、幼児の手を引いて忙しく通りすぎていく若い母親の姿をよく見かけたものである。

0歳～3歳児を預る施設は、大別して3種類ある。法的にはいずれも健康省(日本の厚生省に当る)の監督下におかれている。直接的には市区町村単位に組込まれている。費用が安く、設備も保母もともに優れており、最も安心して預けることができるといわれているのが、公営の施設(les crèches)である。しかし施設数に限りがあり、入所希望者が多いためになかなか入所できないという難点がある。妊娠したことがわかったら、すぐに登録したほうがよい、といわれるのはそのためである。優先される入所条件としては、①夫婦共働きで収入が少ない、②母子家庭あるいは未婚の母親で、働かなければ生活できない経済的事情、③夫か妻のいずれかが学生で、いっぼうが働いている、④夫婦とも学生、などを挙げることができる。

公営の保育所に準ずるものとして、当局(市区町村段階の)が公認した私立の保育施設もある。多くは慈

善団体が経営している。託児時間は両者とも原則として午前7時～午後6時半で、週5日制（水・日曜日休み）である。保育料は前者に比べて後者のほうが倍近く高い（前者の1日13フランに対し、後者は25フラン前後）。

第3の保育施設としては、家庭の一部を開放して子どもを預る、いわゆる無認可保育がある。これは費用が最もかかり、ミルク・幼児食を持参する機会が多い。しかし時間的にはかなり融通が利き、事情によっては夜遅くまで、または朝早くから預ってくれるという利点がある。

3歳～6歳児（場合によっては2歳児から）を預る保育所は les garderies d'enfants または les jardins d'enfants といい、大部分が私立で、健康省管轄である。さまざまな作業と遊びを通して、身体的・心的能力の発達を目差した施設である。後述の幼稚園の絶対数が足りず、また1日の在所時間が長い（午前7時～午後6時半）こともあって、働く親たちにとっては望まれる施設となっている。

幼稚園

フランスの教育制度は大別すると、初等教育・中等教育・高等教育の3段階になる。初等教育には幼稚園も含まれるので、年齢的には、フランスでは満2歳から教育対象者となる。幼稚園(les écoles maternelles)は直訳すれば「母親代りの学校」ということになる。初等教育は2歳～6歳の幼稚園と6歳～11歳の小学校(5年制)に分れ、それぞれ独立した建物であるが、小学校に付属した幼稚園（「幼児クラス」という）も存在している。



ブローニュの児童遊園、パリ

幼稚園には公立・私立の別があるが、数のうえからみれば、公立幼稚園が7対3の割合で多く、私立の場合は、多くはカトリック系である（フランス人の90%はカトリックだといわれている）。幼稚園の絶対数が少ないために、地方にいくと、4、5歳児でも小学校に入学しているケースがみられる。日本と異なり、6歳入学の原則は必ずしも守られておらず、簡単なテストに受ければ4歳児でも小学校入学を認められる場合もあると、ブルゴーニュ地方のリセ（高校）の教師が話してくれた。

フランスの学校は、他の欧米諸国と同様、9月新学期なので、幼稚園登録は6月・7月に行うのが普通である。入園の資格・条件は厳しくなく、国籍を問わず受入れてくれる。ただ2歳で入園させる場合は、排泄習慣が確立されていることが条件となる。

幼稚園はフランスでは初等教育の一貫として位置づけられているが、もちろん「義務制」ではない。義務教育期間は小学校入学の6歳から16歳までの10年間で、日本よりも1年長い。1日の在園時間は日本に比べると長く、1週27時間で週5日制、土曜日は午前中であ

る。昼休みは2時間で、原則として家に帰って食事することになるが、最近では、事情によって給食も行われている。昼食に2時間取るというのは、フランスの長い風習で、子どもだけでなく、親もかつては2時間の休みを利用して、家に帰ったものである。したがって昼食が家族だんらんの最高の食事であった。近来、首都圏が拡大され、通勤圏が広がるに連れて、この風習はかなり薄れてきている。幼稚園の始業は午前8時半から9時で、終業は午後4時半ないし5時である。母親が働いている場合、午後7時までの延長を認める幼稚園もあるという。

フランスにおける幼稚園の役割は、それぞれの子どもに最もふさわしい未来を準備すること、言換えればひとりひとりの可能性を最大限に伸ばす手段を与えながら、出発の時点での発達の可能性を平等にすることにある。1968年のアミアン会議では、幼稚園に限らず、すべての教育制度のための目標を次のように定めている。「ひとりひとりの子どもの変容の能力を伸ばすこと、知識の習得や学び方を習うことなどは、もはや本質的な問題ではない。問題は子どもがいかに成長するかを学ぶことである」。この精神に沿って、幼稚園では人格と社会性の形成に重点がおかれ、そのために話しことばの学習、絵画・歌・工作などを通してのさまざまな表現能力の開発、思考・推理の形成および体育などが具体的なカリキュラムとなっている。

遊び場

前述したように、通りで子どもが遊んでいる姿を見かけないといっても、子どもの世界がないわけではない。市区町村単位で、どこの地域にいても、緑に覆



パンセンヌの森のパンダ、パリ

われた広場や小公園があちこちにある。それは老人の憩いの場であるとともに、子どもの遊び場でもある。サッカーに興じる少年、群をなして遊び回る少女、ぶらんこやシーソー、砂場で元気よく遊ぶ子ども、どこの国でも見かける光景がそこにある。小学生以上にはさまざまなスポーツ施設が提供されており、使用料はきわめて低廉である。

耕地可能面積が全土の80%を超えるフランス（日本は10%台）では、パリをどの方向に離れても、30分とたたないうちに、川、森林、平坦な農地を見ることができる。パリ市内には森林公園ともいえる2つの大きな森が東西に存在している。動物園・植物園・児童遊園、さまざまな大公園・大庭園が子どもに格好の遊び場を提供している。

夏・冬のバカンスには、コロニー（日本の林間・臨海学校）が地域ごとに開設されていて、長期間、自然を背景として、心身の育成が行われている。地域社会が子どもを育成する伝統と力をもっているフランスでは、学校だけにしつけを含めた教育を任せていないのである。

インドの 建設現場の託児所



やま ぐち まこと
山 口 真
ユネスコ・アジア文化センター
文化事業課長

移動託児所とその関連事業

移動図書館・移動劇場・巡回診療所などは日本にもなじみがあるが、インドには建設請負業者が建設現場に設けている移動託児所（モバイル・クレシュ；mobile crèche）がある。「貧困は不道德である」と、この移動託児所の創設者、メーラ・マハデバン女史（Meera Mahadevan）は言っているが、移動託児所はインドの貧困との闘いのなかから生れたものである。なん世紀ものあいだ、親が壮麗な都市建設に従事するいっぽうで、かれらの子どもは道路の端に寝かされていた。人々はぼろ布の傍らを通るとき、泣声が聞えなければ、そこに子どものいることに気づかない。このようなことはニューデリーだけではなく、インドの全域に見られる状態であった。

この問題を解決するため、建設現場に移動託児所が設けられたのであり、0歳から12歳の子どもの収容するため、託児所と、学校センター（school centre）の事業が行われている。ここには0歳～3歳児グループ

の託児所、3歳～6歳児の保育クラス（nursery class）と、6歳～12歳の学童のための小学校クラス（elementary class）の3つのセクションがある。さらにこれだけでなく、子どもと母親の日常的な接触の必要性から、成人教育プログラムが併行して行われている。

託児所（0歳～3歳児グループ）

建設現場で託児所用にと充てがわれている場所は、たいいてい条件のよい場所ではなく、まだ完成していない超高層ビルの地下であったり、18階であったりする。振動がひびき、ほこりの舞い上がるなかで保育活動を続けるとき、職員はその場所を快適に保つよう最善の努力を払い、かさかさした環境を少しでも豊かにするために、子どもの描いたカラフルな絵を張って所内を飾る。またゆりかごやベッドには、かわいらしいモビールを上からつるし、おもちゃと名のつくものをたくさん周りに置いている。1か所に子どもが50人収容されているとして、標準予算が10ルピーあれば、おもちゃを十分与えることができる。

ここに来る乳幼児は、生後3～4週間で、ほとんどが栄養不足のため、初めに健康診断を受け、巡回医師の指示で食事療法が採られる。たいいていの乳児にはミルクとビタミン剤が与えられ、必要に応じて高タンパク食も与えられる。医師が託児所を訪れるのは週1回だけだが、託児所の責任者と栄養士が、乳児の成育状況を細かに観察している。

子どもは母親にほとんどかまってもらえないので、託児所が家庭的なふんい気を与えるよう心がけている。そして子どもの身体的発達はもちろんのこと、情緒的にも知的な面や社会的な面においても発達が促進され



移動託児所

るように、あらゆる努力がなされている。たとえば託児所では子どもに耳慣れた昔からあるわらべ歌を流しているし、子どもの言葉を豊富にするために乳児にも意識的に話しかけている。

移動託児所は、衛生設備のない、非衛生的環境のなかでの保育活動のため、所内の衛生水準を維持することにたいへん苦勞している。以前は幼児がトイレとして使える場所がほとんどなく、それをどうにか間に合せ、その排出物を衛生的に処理する方法を考えねばならなかった。託児所内で行われるプログラムは、どれも家庭でできるものがほとんどである。

保育学級 (nursery class, 3歳～6歳児グループ)

貧しい国々では、保育学級はぜいたくだと考えられているが、それは、今まで保育学級というと、高価でいろいろ備品を備えているのが普通で、財源の限られた団体にはとても手が出なかったからである。

インドには現在、社会福祉省の援助を受けた保育学級が数千もある。しかし備品不足のため、理想的な運営とはいいがたい。このような保育学級が子どものた

めになるのか、子どもはほうっておいたほうが自然から多くのものを学ぶのではないか、という声が再三あがっている。こうした疑問に揺れ動きながら、3歳から6歳までの子どもに、発達に必要な刺激を与えるためにいろいろ考え、その土地特有の安い素材や、廉価な方法を取入れている。保育学校で使っている教材はボール紙、グラフ用紙、たこ用の紙、木製ビーズ、はさみ、黒板、石、木の葉、花、合成粘土の代りに陶土、縫いぐるみ人形、古いサリー、積み木などで、その他にもその土地特有の、ただ同然の品物を使っている。

地域特有の習慣や祭礼はお話の題材として利用し、物語風な民謡は歌唱指導に取入れている。このように文化的に親しみのもてる方法を採用しているため、教師にも次々に試してみようという気を起させ、子どももそれに満足している。保育学級のセクションでは、子どもの日常生活に根ざしたプログラムが行われており、どんな方法でも、インド流に直してから採用している。

小学校クラス (elementary school, 6歳～12歳児グループ)

財源があろうとなかろうと、どんな子どもも幸福な子ども時代を過す権利がある。0歳から6歳までの乳幼児に関してはその解決策が考えられているが、同じように機会を奪われている6歳から12歳までの子どもの要求をも満たしてやらねばいけない。託児所がない場合は、いつも年長の子が赤ん坊の世話をし、家事もやっている。したがって当然のことながら、かれらは学校に行けない。たとえ親が子どもを教育しようと決心しても、解決しなければならない問題が多い。

デリーでは小学校教育は無料で行われ、社会経済的



雨のなかで遊ぶ子ども、テリー

に下層階級の子どもの家庭の子どもは、教科書と制服が無料で支給される。しかし残念なことに、社会の最下層の人人は完全な文盲であり、都市における市民生活とは無縁の存在であるため、このような機会が与えられていることさえ知らない。そのようなわけで、趣旨は良くても、実際には、政府が最下層の人にまで手を差伸べていることにならなかった。

そこで移動託児所が乳幼児の世話をするときには、その兄弟姉妹を小学校セクションに入れて、地域の小学校に編入できるよう準備指導している。移動託児所は当初から地域の小学校に相当する小学校を運営することをせずに、子どもが小学校には行ってやってくれるよう援助するにとどめた。

そういう子どもは移動託児所の開く教室には行って、数と文字の基礎知識を覚える必要がある。移動託児所は地域の小学校になん百という数の子どもを送出している。8歳から12歳までの子どもには集中的な教育プログラムが作られているので、年齢相応の学年に編入できることが認められている。

インドにおけるもうひとつの問題は学童の落ちこぼ

れである。小学校に編入された子どもの約80%が、さまざまな理由で落ちこぼれている。その最大の理由は貧困である。移動託児所の調査では、文盲の両親をもち、家庭のふんい気が殺伐とした子どもは、学業に遅れを取る。そこで移動託児所は小学校に通う子どもに引続き特別指導している。毎年、夏休みに開放して、そのような子どもがクラスのみな追いついていけるよう指導している。貧困のために知識が不足する子どもには、その不足を補うための方法が、いくつか採られている。たとえば、史跡・博物館・郵便局・鉄道の駅などを訪問することがカリキュラムに組み込まれている。

移動託児所は多くの問題を抱えているが、そのなかで最も難しい問題は、世間の態度である。ここに来る子どもたちが常にアウトサイダーの存在であるということである。このような子どもは社会の一部として認められていなかったのである。例を2、3挙げると、建設現場に託児所を開くときは、そこの建設請負業者に設置場所を一任しなければならなかったが、ドアがなかったり、窓や床のない場所が充てがわれた。建設現場で働く技師などは、このような子どもたちが設備の整ったまともな場所を必要としていることに思いもつかなかったのである。そこで移動託児所は開設場所を、かぎがかかり、掃除しやすい床があり、雨漏りのしない建物と指定するようになった。

母親集会 (mother's meetings)

母親集会は現在、移動託児所の活動のなかで、一般によく知れわたったもののひとつである。集会は料理講習会から始った。当初は遠くから様子をうかがう人が多かったが、やがて母親たちのはにかみと疑いの目



昼寝の時間、移動保育所

が消え、若い職員と冗談を交わすようになった。そして月1回の集りを楽しみに待つようになった。

そうすると母親たちは料理講習会の材料の準備を職員に任せたらなくなり、自分自分の家から料理器具や材料を持寄り、手助けするようになった。テーマは栄養教育に始って、子どもの世話や保健衛生、離乳食、妊婦や授乳中の婦人のための食事へと移っていった。

教育プログラムのなかに、模擬選挙など政治問題をテーマに取上げて、著名人をゲストに招くこともある。

移動託児所の成人読み書きセンター(adult literary centre)が行う読み書き教室はあまり人気がないが、一般集会には人がずっと多く集る。最も人気のあるのは演劇グループの演じる劇である。一般集会では宗教的な問題から始って、社会的・政治的問題に発展する指導を行っている。季節労働者よりもスラム街住民のほうが早く進歩している。

地域社会とより多く接触しようとする解決方法は他にもたくさんある。社会参加(community involvement)という言葉は、ソーシャルワークの分野で最も論議を呼んでいるものであるが、ここでは昔からインドにあ

る簡単な接待方法を取入れて、地域社会に参加できるようになった。職員がスラム街労働者宿舎に行くときは、ゲストとして行くことにしている。職員が労働者宿舎に行くことには、請負業者も労働者も賛意を示した。しかしスラム街には招待してくれと頼んでから訪問する。そうすることによって、スラム街の人々は自分たちが託児所職員にとって重要な存在であり、信頼されているのだという気持ちになるのである。このなんでもないことの積重ねによって、スラム街の住民の協力を十分受けることができるのである。

Lok-Doot

Lok-Dootは移動託児所が啓発活動を目的としてもっている劇団で、読み書きプログラムにさまざまなかたちで協力し、参加者を刺激して教育する。1977年に発足した。団員のほとんどが移動託児所の才能ある職員である。Lok-Dootは娯楽的なものを演じるのではなく、教育の重要性や、日常生活のうえでの教育の必要を強調した寸劇を企図している。Lok-Dootは時には民話をもとにした子ども向け劇や、労働現場で起きる事件を主題にして演じ、観衆に親しまれている。

インド政府は第5次計画で託児所プログラムを優先的に取扱っており、移動託児所は現在、福祉省から多額の助成金を受けている。この助成金により、請負業者がたとえ金銭的援助を拒んでも、移動託児所は労働現場で活動できるようになった。

移動託児所の目的は、活動を通じて、地域社会を教育することにあるのだ。

*この記事はMrs.Mahadevanがユニセフの機関誌「Assignment Children, No. 4, 1977」に寄稿した論文に負うところが多い。

台湾の小学生

—2つの家庭とその生活—



りほ 高 義
筑波大学大学院生

台北市の児童

台北（タイペイ）市は台湾の北部に位置する、人口約215万人で、政治・経済・教育・文化・産業・交通などの中心となっている。行政院直轄の特別市で、面積275.9km²、人口密度のかなり高い都市である。

児童教育は就学前教育と国民教育の2段階に分れる。就学前教育はほとんどが私立である。国民教育（義務教育）は大部分が公立で、6年の年限を9年に延長して、すでに10年過ぎた。前期の6年を国民小学と称し、後期の3年を国民中学という。

台北市には国民小学が121校あり、11校が私立で、その他は公立。英才教育と各種障害児教育は、私立もあるが、主に公営。就学率は小学で99.9%、中学で98.82%、かなり高い普及率である。政府の年間予算は憲法に基づいており、台北市は25%を教育に注いでいる。

ここで付け加えて述べると、国の経済成長率は過去20年間の平均で8.9%、日本に次いで世界第2位である。国民所得も急カーブを描いて上昇し、昨1978年には1

人当たり平均1,304ドルに達している。経済先進国の列に加わる日もそう遠くないだろう。

林さんの家庭

ここに2つの家庭を紹介しよう。

1つは林有為さんの家庭。林さんは38歳、妻の淑恵さんは2つ年下、共に終戦を学童初期で迎えた。中・南部の貧農の子である。戦後の土地改革で初めて自分の田畑をもったかれらの親は、自分よりも幸せにとの念願を子どもに托し、チャンスに富んだ戦後社会に送り出した。

2人は勤務でエリートコースを進んできた。有為さんは台湾大学卒で、大建材工場の工場長、淑恵さんは師範専科を夜学で卒業し、小学校の教務主任（教頭）である。校長を目指して職務に研究に、また読書に励んでいる。林さんの級友も各自の志望と機会により、政法・経済金融・医薬・文教界で、重要ポストに就いて活躍中。社交は級友や同僚が多いが、顔は広い。子



公園のローラースケート場

どもが自分よりもなお幸せにと願い、献身するのは当然であろう。

住いは高級住宅区にある160㎡余の家で5人家族それぞれに、窓のある部屋がある。各人が自分の好きなように整理・整頓し、個性と自主性を持ち、互いに尊重し合っている。

子どもはみな読書好きで、長男の誠忠は小遣いの大部分を書籍買いに費やし、めったに買食いをしない。小学6年生で唐詩三百首や三



海水浴場

字経のほとんどをそらんじている。作文が学校文集によく掲載される。長兄の自覚が強く、模範となるように自戒し、自信をもって学業に勉めている。父と一緒に盆栽をいじり、日曜大工などを手伝うが、医者志望で、最近は何書館に入りびたりのことが多い。

娘の美真は利口で優しい。幼時から母に励まされてピアノを習い、小学2年のときに合唱団入り。絵も兄にひけをとらず、いろいろな機会に賞を得、それを部屋いっぱい誇らしげに飾立てている。常に自発的に台所を手伝う。母の願いは、娘が多才多芸で、内外をはっきり切回せる現代女性になって欲しいこと。娘はすなおに親の愛をかみしめ、毎日を忙しく楽しく暮している。将来は良妻賢母の法官になりたいという。

末の男の子は小学3年生。兄や姉に影響されて、絵も音楽も好き。だが独立性と持久力がやや劣る。とき

どき自分の新発見をまじめくさって語り、一家の笑いをかう。パイロットになることを希望している。

日曜日と祝日はほとんどが娯楽日である。前夜に家族の意見をまとめて準備し、当日は朝早く、父の運転で出発する。近郊の山登り、有料池での魚釣り；あるいは公園でのたこ揚げやスケート遊び。都市の子どもにとって、自然と農村は大きな魅力である。

家族の誕生日も団らんの高まる日である。だれもがそれぞれの日を覚えていて父はケーキを注文し、母はごちそうを作る。子どもたちは心をこめて、毎年新しい趣好で祝福カードを作っている。たまには友達を招き、歌と笑いのひとときを過す。

3人の子どもはボーイスカウトの参加者である。奉仕と善行を榮譽とし、できる限りの力を行動で表す。強く、明るく、そして正しくと願う親の愛と理解のも



小学校の子防接種

とで、幸福を体いっぱい感得する子どもたちは、一面では親の疲れを忘れさせ、職場で奮起する力の源泉となる。この関係は教職者と児童との関係にも共通するものである。

易さんの家庭

もう1つは台北近郊に住む易忠良さんの一家。易さんは54歳。河南省の田舎生れ、中日戦争中、逃離の人人と南移の際、親・兄弟と死別し、軍隊と一緒に台湾に来た。軍隊で習得した自動車運転の技術と、退役金で買った車で、家計を担っている。妻の梁仁美さんは台湾南部の田舎娘である。戦争中に父を失った、子だくさんのなかの1人で、年は夫より10歳下の44歳。晩婚ではあるが、今では1男1女の小学生がいる。夫婦と

もまともに学校へ行けなかったが、忠良さんは軍隊で、仁美さんは国民学校内の民教班で、若干の読み書きを覚えた。子どもに良き環境と教育を望み、幸福な人生を歩むよう望む親心は、人並以上に強い。

忠良さんの仕事は朝が早い。明け方に出て夜6時に帰宅する。客送りで遅くなる場合もあるが、妻子は自信をもって待ち、一緒に夕食を取る。跡片づけも4人で一緒にするから、早くからテレビのまえや来客用の

部屋につどい、くつろぐことができる。そこで今日のできごとや、明日のことを語合う。

子どもを学校に送り出したあと、仁美さんは近所の商店へ家事手伝いに行く。主に洗たくとふき掃除である。半日で仕事を終え、子どもの放課前に家に帰る。これで子どもの将来の教育資金と住居の月賦が賄える。

清潔好きでむだ口を利かないかの女は、多くの人に好かれ、お手伝いを頼む人が多い。だが2軒以上は受け付けない。疲れて自分の家事を疎かにしたくないからであると言う。

忠良さんは昼休みをきっちり取り、事故なし運転の誇りも高く、妻子との時間を大切にする。むだ遣いやつまらない享楽の誘いには目をつぶる。

子どもは親の心をくんで学業に励み、自動車洗いや

家事を手伝う。夕食までに宿題を終え自分の部屋を清掃し、学校図書室から借りてきた本に読みふける。

男の子は建国といい、もう小学6年生。バスケットの学校選手で手足が長い。自然科学が好きで、実験のときには教師の良き助手を勤める。物理・化学などを将来専攻したいと望んでいる。また交通奉仕隊の班長であり、当番の1週間は朝早く登校し、まじめに責任を遂行している。

娘の名は建平、小学3年生。字がとてもきれいで、習字がよく展示される。将来は教師志望である。

子どもは2人ともはきはきしていて、級で人気が高く、模範生に選ばれて、親をほくほくさせている。

日曜日などには忠良さんも仕事を半日休み、日曜大工をしたり、妻子を乗せて植物園や遊園地に行ったりする。子どもが写生をしたり、走回る姿を見るのは楽しい。時には妻の手作りのおやつを持参、時には郷土味のある食堂で家以外の味を満喫する。子どもが明るく健かに伸びていく姿は、2人の親に疲れを忘れさせ、明日への力をわき起させる。ささやかだが満ちたりて和気あいあい、希望にあふれる一家である。

幸せな子ども

今日の台湾は、裏町にも片田舎にも、ぼろをまとい、栄養不良にあえぐ人が見られない。突然不幸に遭遇した人には、養護施設があり、団体や国民が政府とともに温かい手を差伸べている。「ひとを助けるのは義務でなく、自分の幸福をもう一度そしゃくする」ことである。他人に知られずに徳を積みたい心は、知識と技術を尊ぶ気持と等しく、五千年の昔から一般大衆の血のなかを流れている。無名氏の献金は数多くあり、機



盲学校での訓練

構や個人名義の奨学金もたくさんある。

今の子どもの教育に、問題と危ぐがないわけではない。だが子どもの親たちは、次世代が今世代に優るように願い、尽力するのを、自分の権利であり義務であると心得ている。

また教育関係の各層リーダーや分子も、伝統と新時代の教育理念を融合している人たちであり、問題を直視して、解決策を練り、各方面の協力を促して、危ぐや問題を一步一步解決する努力をしている。

みんなが一つ船に乗った気持で、各自の責務を果し、互いに協力し合っているおとなの姿は、子どもに、そして国家に将来の幸福を約束する力となるだろう。国と子どもの今日と明日のために、おとなは実に真剣である。それゆえに今の子どもは、かれらの父母や祖父母よりもなん倍も幸福であり、希望に満ちているのである。

ミクロネシア トラック諸島の子ども



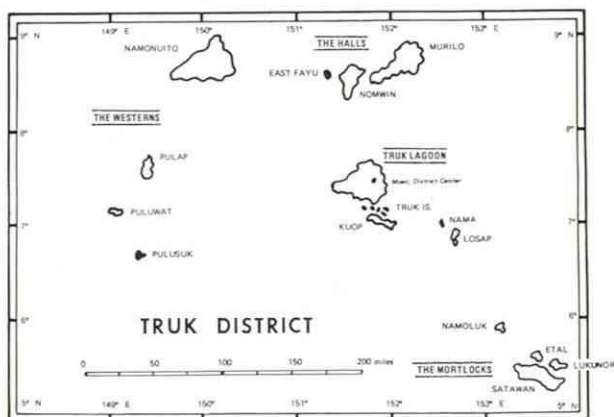
ふる 古 市 いち 市 しん 慎
東京中央YMCA体育館主事

はじめに

1978年の夏、3週間ほどミクロネシア・トラック諸島を訪問する機会を得た。これは、アメリカ・ジョージウィリアムズ大学の学生、ハワイおよび東京のYMCAのボランティアリーダー数十人が協働して、トラック諸島の子どもにスポーツ・レクリエーション活動を行い、かれらに夏休みの時期を有意義に過してもらうためのものであった。

このプログラムはトラック行政府が主催し、アメリカ・日本のYMCAがそれに協力する形で実施された。またプログラムのもうひとつの目的は、トラック・アメリカ本土・ハワイ・日本と、それぞれ異なった文化的背景をもつ青年たちが一つになって、トラックの子どもに接し、異文化を理解し合うという側面をもち合せたものであった。

そのなかで私は心に残る多くの経験をもつことができた。これから述べることは、短期間の滞在であり子どもたちについて十分な調査ができたわけでもなく、



ミクロネシア連邦

私の主観によるところが多いと思うが、特に印象に残ることである。

トラック諸島

トラック諸島はグアム島から東南へ飛行機で約1時間半のところに位置し、周囲を約150kmの環礁に囲まれて点在する大小約40の島々である。

中心の島がモエン島（島の周囲約20km）で、経済・文化・教育・医療、そして観光の面といったところが集中している。

気候はたいへん湿度が高く、じっとしていても汗が出てくるくらいである。人口は約3万人といわれている。産業は特にこれといえるものがなく、大部分の島民の生活は、いわゆるその日暮しのものである。このトラック人の生活態度についてはあとに触れることにするが、日本人の生活感覚ではおよそ想像もできないくらいであった。

このトラック諸島をはじめミクロネシアの地域は、歴史的に日本とかがわりがたいへん深い。第2次大戦終了までこの地域は、日本が委任統治していた地域で

あった。戦後はアメリカの信託統治領となり、つい最近、ミクロネシア連邦として独立した。

澄みきった青空と真っ青な海の、その海岸近くに、日本のなん隻かの軍艦が、赤茶けて横たわっている。島民の40歳以上の人々のほとんどが、日本語を理解し、日常会話くらいならば話ができる。しかしそれ以下の年代になると、英語を理解するようになっていた。小さな島々に住む一民族でありながら、歴史的影響によって、世代によって、まったく異なった、日本・アメリカという2つの国の文化的影響を受けて今日に至った。私はそのトラックの現実を見て、たいへん複雑な心境にさせられた。

さて、トラック人の生活についてであるが、トラックには産業といえるものがほとんどない。その必要に迫られていないのかもしれない。大部分の人々は、生活に必要なものを蓄えのなかから最少限買求めるだけで、そのほかは自然の恵みを利用する。それで生活が可能なのである。したがって労働に対する義務感や意欲もあまり生れてこないであろう。日中からただぼんやりと木陰の路上に座り、日没までじっとしている様もよく見受けられる。

このように南国地方特有ののんびりした生活の仕方から、トラック人を批判するのは意味のないことであるが、日本人の勤勉さからはとうてい考えられないものであろう。

子どもの遊び

滞在中に受けた子どもの印象は、自然のなかで自由奔放に生きている姿と、キラキラと輝く太陽にも似たひとみであった。



ボール遊びの指導

子どもの遊びは、自分たちで創意工夫したものばかりである。たとえば、つりにしても針と糸は買求めるが、さおはあちこちに転がっている木切れを用いる。

つりに飽きれば丸裸になって海へ飛込み、上手とはいえない自己流で泳ぎ回る。のどが渴けば、やしの木に登って実を取り、石などを利用して上手に飲み口を作って飲む。——すべてこういった具合である。

私は出来合いの物質文化に浸りきっている今の日本の子どものことを思い出さずにいられなかった。

トラックの子どもは、このように自然とともに生き、自然を相手に上手に遊ぶ技術を身につけているのである。すべてがセットされ、物の豊富ななかで育っている、日本の子どもには経験できない、大きな力をもっている。

スポーツとしては、サッカー・空手・野球・バスケットボールなどに興味をもっている。特に空手にはおとなも子どももたいへん興味があり、日本人とわかれると、空手を教えろと、常にくい下がられた。

また子どもたちが「桃太郎さん」の歌をはじめいく



子どもと指導者

つかの日本の歌を覚えていて、われわれに歌ってくれたことも思い出す。

いくつかの点でトラックの子どもの様子を見てきたが、全体の印象として、どの子どもも自然のなかで思う存分自由に飛回っており、子どもらしい快活さに満ちあふれ、その目には輝きがあった。

日本では小学生の自殺問題などが、こんにち社会的に取上げられているが、子どもの本来の姿について、かれらに学んだことは実に多かった。

教育

トラックで学校は、モエン島の3～4校のほか、比較的大きな島に各1校程度である。学校のない島の子どもは、船で通学している。小学校は6歳～15歳の子どもである。

高校はモエン島のトラック・ハイスクール1校だけである。立派な体育館と校舎を備えた鉄筋コンクリートの建物である。

さらに短大・大学へ進学する者は、それがトラック

にないため、グアム島やアメリカ本土・ハワイなどに留学するそうである。しかしそれはごく限られた人数であり、またかれらが帰国しても、適当な仕事がないとのことであった。

教育制度はこれから発展していくであろうが、かれらの民族性や地理的状況を考えると、多くの問題があるように思われた。しかしトラックの発展を考える場合、この「教育」が今後重要なポイントとなるように思われる。

家庭・親子の関係

トラックでは男性優位の社会的風習が、現在でも生きているようである。島の会議などに、女性は絶対に参加できない。男性のまえを通るときなど、正式な場では女性は身をかがめるのである。そうはいつでもこの風習も、時代の流れとともに影をひそめたようだ。青年のあいだでは、このようなことはあまり見受けられなかった。

子どもたちのなかに、「イチロウ」とか「キヨシ」、



女の子たち



子どもたち

あるいは「ゲントロウ」などと、日本人の名前をもっている者がかなりいる、トラック人の一部の親たちが、日本に対してある種の郷愁のようなものをもっているのも事実である。

トラック諸島の子どもこれから

1979年春、ミクロネシアのいくつかの地域は、アメリカの信託統治下から独立した。トラック諸島も、ミクロネシア連邦国家の一員として歩みはじめた。しかし長い歴史のなかで異国の支配を受けてきた影響は、民族の価値観や生活習慣、あるいは社会構造そのものにまでも変化を及ぼしている。したがって連邦国家が樹立されたとはいえ、すぐに独り歩きができる保障はないだろう。ミクロネシアの他の地域との協力関係が今後いっそう大切になるのではないだろうか。

このような環境のなかにあつて、トラックが目差していくものは、やはり開発であろう。この開発をかれら自身が見詰め、見極めていかななくてはならない。かれら自身の民族性や習慣に適した施策のなかこそ、真の開発があるだろう。他国からの開発援助にそのまま同調することなく、自立することの難しさと正面から対決すべきである。そのために

特に日本が経済的・文化的援助をしていくことは当然であろう。

もういっぽうに教育の問題がある。今回われわれの実施したプログラムは、ある意味では行政府が、子どもの教育に寄せる関心の度合を示したものともしよう。子どもに良い教育を施していくなかこそ、トラックの地に着いた発展の可能性がみいだされるのではないか。

ミクロネシア・トラックの子どもたちに期待されているものはたいへん大きい。ミクロネシアが将来に向かって歩みはじめた今、その責任はかれらの肩にかかっているのである。

自然に恵まれたミクロネシア・トラック諸島、そこに住む子どものひとみの輝きがいつまでも消えることのないことを祈ってやまない。

メキシコの子ども

—文化と伝統—



やまもと 山本 哲士

相模女子大学講師

アミーゴ気質

私は「メヒコ」が好きだ。「メキシコ」という英語読みが、日本で一日も早くなくなるのを願うメヒコ好きのひとりである。日本とメヒコが近くなり、相互の交流が数日の旅行や営利の産業関係でなく、人と人との関係が中心になったときには、だれも「メヒコ」を「メキシコ」と呼ばなくなるだろう。

メヒコの良さは、美しい自然、雄大なピラミッド文化、華やかな壁画、陽気なマリアッチ音楽などもさることながら、人間がなんともいえぬ温かさを持ち、「人懐こい」ことにある。メヒコ人は自分の殻に閉じこもろうとはしない。自分を相手に開いて、いつでも「アミーゴ（友達）」になろうとしている。かれらにとっていちばん大切なことは、友達になることである。

日本文化に浸りきった者には、メヒコ人の「アミーゴ気質」がとても浮薄に見えるらしいが、それは誤解というものである。その日に友達になったばかりにもかかわらず、なん十年來の友人のようにもてなす。メ

ヒコ人は相手と友達にならないと、精神が安定しないのである。アミーゴ気質に満ちていない者は、メヒコ人離れした、アメリカ合衆国化かヨーロッパ化した人たちと思って間違いない。メヒコ人がアミーゴ精神でこちらにかかわってこないなら、それはうさんくさい野郎だと思われていると考えてよい。

このようなアミーゴ気質は、メヒコ言語特有の「タブーの言葉」である「グロセリア（卑俗語）」のなかによく表現されている。相手を最も侮辱する言葉が、相手との最も密接な関係を意味する。こんなにひどい卑劣な言葉を使合っても崩れない信愛関係だ、というわけだ。ほめ言葉の共有は偽りだが、冗談をたっぷり込めて卑俗な言葉を言交わす。この卑俗語と冗談は鋭い批判意識となっており、ひとりひとりの民衆がもっている。おそらく世界でも、日常語が政治的な感覚までを有して使用されている国は、まれだと思われる。メヒコ革命の脈々としたエネルギーが、メヒコ人の血のなかを流れている、ひとつの現れかもしれない。

子どもとカトリック教

メヒコの子どもは私の見た限りでは、3つの文化の洗礼を受けているようだ。ひとつは民衆の生活に染みわたっているカトリック教の文化、ひとつは独立からインディオ出身の大統領、ベニト・ファレスを経て、メヒコ革命に連なる革命ナショナリズムの文化、そしてもうひとつは「マッチスモ」と呼ばれる精神分析的に「男主義」の文化である。

ほとんどの人がカトリック信者のメヒコでは、生誕1～5か月のあいだに洗礼を受け、母親から十字の切り方を自然に身につくように教えられる。右手の親指



ピニャータ

と人差指を交差させて、額・口・胸の各所で十字を切る。聖キリストと神をたたえるこの様式は、教会のまえを横切るときにもなされる。子どもは4歳のころ、「私たちのためにキリストが死んだ」といった信仰心を教えられ、小学校へ入学するころから、「教理問答」を土曜日ごとに2時間ほど教えられる。公立学校から宗教教育は切離され—1920年代のカジュス大統領の、世俗化のための教会閉鎖政策はたくさんのキリスト教信徒の血の反乱を生んだ—ているが、子どもたちは聖書を知らないでも、教理問答を知っているのである。メヒコ・カトリックの大きな特長は「聖母グアダル

ーベ」の「聖母信仰」である。12月12日のグアダルーベ祭に、1～7歳の子どもは、インディオの格好をして教会に集る。グアダルーベを教会に知らせたファン・ディエゴをまねて、口ひげを生やした男の子や、山中のインディオ女性にふんして着飾った女の子は、子どもおとなになって聖母をたたえる。メヒコ独立の父、ミゲル・イダルゴ神父は、かつて聖母グアダルーベの旗をかざして独立を呼びかけた。社会科の教科書にはその姿が雄々しく描かれている。

ピニャータ

土着信仰のカトリック教への吸収は、聖母の創造ともうひとつの子ども祭、「ピニャータ」の遊びに見られる。12月16日から24日にかけて、家々には、馬小屋のなかの聖母マリアとイエス・キリストの人形が飾られる。子どもたちはろうそくを先頭に、マリアとヨハネをまねて、聖歌を歌いながら行列行進する。そのあとで張り子で作った種々の形をした人形が屋根から綱でつり下げられたのを、目隠しをして割る。「ダレ、ダレ、ダレ（当れ、当れ、あーたれ）」といった掛声に合せて行う。日本のすいか割りに似ており、儀式遊びである。ピニャータが割れると、なかにはいつている果物や菓子が飛散る。子どもたちはそれを目がけて殺到する。この遊びのあとにクリスマスを迎えるのだが、ピニャータは今は日常化して誕生日の祝いでもよく行われる。子どもにとって、いちばん楽しい魅力に富む遊びだ。

東方の三博士

メヒコではクリスマスにサンタクロースはいない。

1月6日、「東方の三博士」が献上物を持ってキリストのところへやってきたこの日に子どもへの贈物がなされる。子どもはまえの晩、自分のいちばん欲しい物を紙に書いてくつのなかに入れる。この夜、商店は深夜2時まで開いており、子どもたちに贈物を買う客でにぎわう。伝統と産業が結付いたひとつの姿であろう。どんなに貧しい家でも、この日は子どもの夢をかなえてやろうとする。

メヒコ人の手によって作られた最初のアニメ漫画が、この「東方の三博士」であったのをみても、子どもにとって楽しいピニャータとこの日の贈物が、カトリック信仰の習慣のなかでどれほど大きい位置を占めているかがわかる。

子どもとナショナリズム

メヒコの学校教育では、独立・ファレス改革（1857年憲法制定）・メヒコ革命が、大きなナショナリスティックな意識を駆立てる重要な役割を果たしている。ナポレオンが攻込んできた対フランス戦の勝利記念も重なって、他国からの侵略を抑えて近代的国家に整え、農地改革を実施したという歴史は、社会科の中心テーマだ。子どもたちは「ピバ・レボルシオン」（革命万歳）という声を熱狂的に習慣化している。それはメヒコ人の誇りであり、メヒコ人の精神エネルギーの基盤となっている。保守であれ革新であれ左派であれ、この革命ぶりを競い合うところにメヒコらしい世界がある。

子どもとマッチスモ

さて、こうした表面に現れた世界の奥処で、無意識の文化を形成しているのが日本でも時たま耳にするよ

うになった「マッチスモ」である。男らしさを妙に誇張するこのマッチスモは、片母親だけの家庭が非常に多いというメヒコの社会問題というよりも、「文化」といっていい世界を構成している。母親の息子に対するでき愛、10歳以下の息子に対する父親の異常な愛情、そして男・女兒の母親への絶対的な信頼・依存は、「母親中心」の子育て環境をつくりあげ、同時に成人男子の無責任さとなって現われている。

母親しかいないといっても、そこにはなんのこだわりもない。それはメヒコ社会の薄暗がりかもしれないが、そのなかで友を得、人を愛し、土地や国を愛するかれらは、悲しみにあふれんばかりの涙を流したかと思うと、次の瞬間にはギターをかき鳴らし、みなで歌い踊り合い、悲しみを吹飛ばしてしまう力をもっている。かれらに同情を示す他国からの外来者が、いかにこっけいな羽目に陥ってしまうか、という場面をいくつも見た。しかしこの問題が文化的に深刻であるのは事実だ。しかも表面的な社会福祉をがんとして受付けられない、力強い生抜くエネルギーを、メヒコ人は子どもを含めて失っていないのは、もっと真実である。

メヒコの子どもは見た目には「落ち着き」がない。それは、だれかがいつもかまってくれ、だれかをかまうのを欲しているあまりの、落ち着きのなさだ。かれらはなにもかも忘れて、思い切り遊ぶ。相手の感情や意識などにかまわず、ストレートに表現する。他人がなにを考え感じているかはおかまいなしに気持をぶつける。そうかといって利己主義ではない。ストレートな表現や行為が相手の迷惑になったと知ると、そこで逃げだすのでも黙るのでもなく、きげんをとり直すように、さらに親しみ深く表現していく。満足を得ることが、



幼稚園児のパレード、クエルナバカ

まず必要なのである。足りないのはいけないのだ。この態度はメヒコ人と日本人を根元から区分してしまう性格の違いである。

セニョリータ

女の子は10歳にもなれば、一人前の女性のように家事の手伝いだけでなく、母親の留守には家事を取仕切るようにまでなる。男の子も小さいころは、一生懸命牛追いをしたり、牛乳を売り歩いたりして手伝うが、14,5歳になると、一般に勝手なことをしはじめる。

女の子の遊びに「ラ・ドーニャ・ブランカ」「エル・ロボ」「ラ・モンヒータ」といった伝統的なものがある。これらは取残された女性の運命を象徴するドラマ的な遊びで、メヒコの文化を象徴しているといわれる。

男の子は「ラ・ローニャ」という鬼ごっこや、ビー玉・こま回しなどで遊び、もう少し大きくなるとサッカーに熱中する。「遊び」もテレビやアメリカ合衆国の

影響を受けて変っていくといわれるが、かれらは年齢の上下や、知合いか否かにかかわりなく、仲間入りをだれにでも開放して遊んでいる。

女の子は15歳に達すると、子どもから一人前の女性「セニョリータ」になる。そしてその祝いが行われる。その日かの女は最高に着飾り、なぜかワルツを踊るのだが、15人の男性とかの女のほかに14人の女性が舞台上で踊る。15歳の誕生日を迎えたかの女の相手を勤める男性は「侍従」と呼ばれる。女の一生でお姫さまになるすばらしい日であり、女の子はその日を待ち望む。

子どもの自律力

ある春の日、私は幼稚園の子どもが、春を呼ぶために、動物や花の衣装をまとって行進している祭に出合った。それは色とりどりで、かわいらしいメヒコのあどけない一面に出合った思いがしたものだ。

この小さな紙面で私は、メヒコの子どもや、おかれている文化や歴史を、とても語尽せない。私がメヒコで生活して一そこはメヒコ市の南西にある小さな町のクエルナバカ、ナウアトル語のインディオ文化とメヒコ都市の近代文化が交錯する町一確信をもって言えることは、メヒコの子どもの生活で「学校」はまだ二義的なものであり、学び・遊びが学校の外で、生き生きと伸びやかに、生きる力として存在するということだ。

メヒコはラテン・アメリカではさきがけて工業化を進めているが、私見では、この国には母性原理の力が大地に根ざして産業化できないほど強く、それをもち続けて生抜いている人が多いように思う。豊かな日の子どもが失ってしまった「自律力」を、メヒコの子どもは貧しくとも決して失うことがないだろう。

イラクの子どもと その環境



さとう 由美子
元在バグダッド

はじめに

ひと口にイラクといっても、北部の山岳地帯では雪も降るし、山ろくには樹木が繁り、丘を越えて見渡す限り麦畑が続く。そこには少数民族の、言語も宗教も違うアッシリア人、クルド族も居住している。西部の砂ばくには遊牧民のベドウィンが羊・やぎ・らくだと暮している。南部には水郷地帯もあり、湿度が高い。それぞれ首都バグダッドと異なる生活が営まれている。1976年11月から1979年2月までの2年3か月のあいだ、主婦として、隣近所のイラク人との付き合いで経験したバグダッドの生活をつづってみよう。アラビア語ができず、下手な英語と手まねを通しての付き合いで、イラク人との生活のはんの一部である。

イラク共和国は人口約1,200万の民族社会主義の国である。入国査証の入手が難しいせいも、イラクの一般情報は日本には少ない。渡航するまえに得たアラブについての知識といえば、砂ばくの焦熱地獄、女性は社会的になんら権利がなくて家畜と同様、回教の戒律

が厳しく禁酒、妻は4人までもてるといった、気の減入るものばかり。

悲壮な気持で降り立ったバグダッドの空港から町までの道路沿いには、ユーカリの並木、なつめやしの林、また中央分離帯や歩道わきには、さまざまな花が咲き乱れ、文字通りオアシスだった。

翌日からホテル住い、従業員やレストランの客、店員や市場（スーク）の野菜売りから受ける印象はよく、不安は薄らいだ。最も驚いたのは、回教のじゅうずをまさぐりながらビールやウイスキーを飲んでいること。バクシーシュ（チップ）を要求しないし、そんなものは期待もしていないこと。治安がよく、3か月余りのホテル住いで、トランクを放置したままでも、一度も盗難に遭わなかったことは、特筆に値すると思う。

もちろん価値観がまったく異なる社会だから、週に一度は多少ヒステリックに笑い転げることも起れば、月に一度ぐらいは心底腹が立つのも事実だ。800年のあいだ異民族に侵略され続けた歴史と、厳しい気象条件を考慮すれば、当然かもしれないが、

ノイローゼから十二指腸かいようになって苦しむよりはと、気持を入替えてバグダッドの生活を見てみると、女性はかごの鳥どころか、意外に解放され、中流以上の家庭の主婦が外で職業婦人として働くのは普通のこと。車の運転もすれば、タクシーに乗って独りで外出もする。あらゆる分野で活躍している。回教の寺院へお参りするとき以外はアバヤ（黒い衣）をほとんどかぶらず、髪をセットして、かなりの厚化粧である。

10月中旬から4月までのバグダッドは雨が多く、朝方の気温もいちばん寒いときは零下5～6度になることがあり、街中ばら（アラビアが原産地といわれる）・



バビロン遺跡にあるイシュタル(勝利の女神)の門(模造)

カーネーション・アイリスが咲き、一年中で最もさわやかな季節だ。街路樹や家々の庭のオレンジの黄金色に輝く実が、美しく緑に映えるのも、このころだ。7色の水を噴上げる噴水のある公園では、男性に混じって、頭からすっぽりアバヤをかぶった女性たちが、黙々と草取りをしている姿も見られる。イラク婦人連盟の役員によると、中流以下の昔ながらの土壁となつめやしの葉でふいた家から出て、女性が町の清掃に従事するのは革命的で画期的なことだそうだ。

4月から10月中旬までは天気予報の必要がない。毎日雲ひとつない青空と摂氏50度を超す暑さが続く。10月に半年振りに雨が降ったとき、あまりの感激にカメラを持って外に飛出したわが同胞がいたくらいである。

夏は汗が滝のように目に流れ込み、その汗がすぐに乾いてしまう。膚が焼けるような炎天下にもかかわらず、朝7時から午後4時まで、建設現場などで働く人の姿が見られるのは驚異だ。メソポタミア文明発祥の地であり、紀元前5千年から高い文化を誇る国のことだからかもしれないが、イラク人は勤勉で優秀だ。

回教徒の女性がかぶるアバヤを見ても、他国と違い、

合理的にできている。きちんと額で止まるように裁断され、そでもあり、両手が使えるように工夫してある。たとえば、女性の黒衣にしてもイランのチャドルは一枚の布だ。ずり落ちないように口でくわえ、引きずった分を絶えず左手でたくしあげ、右手だけが使えるというのに比べれば、イラクのアバヤがいかに活動的かつ合理的であるかがわかる。シルエットも美しい。

教育

1958年の革命以来、イラクの学校は小学校から大学まで国営である。したがって授業料や教材費などはすべて国が負担している。小学校6年、中学校6年(日本の高校に当る高学年に進級するには、バカロレアと呼ばれている国家試験に合格しなくてはならない)、大学4年または5年となっている。大学の学部選択は入試の成績で決り、個人の希望がかなえられる率は高くない。上のほうから医学部・工学部などの順で、成績さえ良ければ、だれでも医師になれる。このほか家政・美術・看護・助産・農業・工業などの専門学校、陸軍大学、陸軍および警察士官学校がある。義務教育は小学6年までということだ。

大学とモデル校になっている一部の中学校以外は、男女別学だ。低学年の女の子たちが、黒い髪に白いリボンを結び、大ぜい登校するのは印象的だった。黒・こげ茶などの制服を着て、特別に厳しく回教の戒律を守っている家庭の女の子は、アバヤをかぶって通学する。女子中学生用に新しいモードのアバヤというものも出回っている。しかしこれはスカーフとレインコート風のもので、風通しが悪く暑いうえに、春から初夏にかけて強い砂あらしが吹きまくるのを、目だけ出



馬車で遊ぶ子ども、バグダッド

して頭からすっぽり覆うアバヤのようには防げない。

学校や施設では、教員とは別にソーシャルワーカーと呼ばれる公務員がいて、運営と管理を行う。わが家の隣に住む弁護士の夫人もそのひとりで、6歳から23歳までの女子を収容する孤児院とその付属校の校長として働いている。情にもろいイラク人らしく、生徒とともに泣き、ともに笑い、子どもの面倒をみている。

働く婦人の子どもを預る保育所も、近代的設備とスタッフで、昨年末に開設された。その施設はイラクに在住する外国人の子どもも受入れるそうだ。

小学校から大学まで、実に試験が多い。隣家の子どもたちもいつ授業があるのかと思うぐらい、試験に追われている。仕事から帰った校長先生も、3人の男子（中学2年生、小学6年生と4年生）を勉強させるのに大わらわ。特に5月の学年末試験になると、1か月の年次休暇を取り、一日中なりふりかまわず、髪を振乱し、遊びたがる子どもたちの首根っ子を押し込み、しつこく激励する教育ママとなる。その姿は普段の優しさからは想像もできない。

一般に子どもたちは、自分たちの部屋があっても勉

強づくえはなく、食堂のテーブルや階段、または床に腹ばいになって勉強する。暗記する学課が多く、本を両手に広げ、朝の涼しいうちに歩きながら覚えている姿が、公園や庭先で見られる。夜は街燈のしたで、家庭着兼寝間着でもある縦縞のパジャマ姿の男子学生の、座って勉強しているのが、印象に残る。この地域がパジャマの発祥の地とのことだ。

大家族主義

一般にイラクの家庭は大家族である。子どもが多いだけでなく、余裕のある者には、親・兄弟・親戚・縁者が頼ってきて同居する。右隣の小さな雑貨屋も29人の大世帯で、年中お祭のような騒ぎだった。毎日のように一家総出で、訪ねたり、訪ねられたりする。その都度、食事時には食物をたっぷり出すので、主婦は忙しい。夏は、夜になると庭でアラブ風のバーベキューをするので、子どもも12時過ぎまで起きている。肉の焼けるにおいをかいだ人には分ける習慣とかで、私たちもお隣にはずいぶんごちそうになった。

長い夏休み

夏休みは6月1日から9月下旬まで。そのあいだ男の子は一日中プールで泳ぐか、道路や空地でサッカーをして過す。新学期の初めの1週間前で前学年の復習をするので、問題はないとのことだった。宿題も塾もない休みは天国だろう。中学生のアハメッドは、昼寝もせず一日中ボールをけており、大学に進むよりも収入の多いサッカー選手になりたいと、イラク版教育ママを嘆かせている。ちなみに国際試合で勝つと、昔は家がもらえたそうで、今でも大統領から自動車をも

らうということだ。女子は家の手伝いや、祝いごとのときに踊るオリエンタルダンスを、母親に習ったりして過すのだろう。

夜になると涼を求めて、人々はチグリス河畔に集ってくる。氷水を入れた日本製のジャーを傍らに置き、てんでにサンドイッチやつけ物をほおぼる。公園には滑り台が多く、子どもたちは夜更けまでさまざまな形の滑り台を上がり下がりして遊ぶ。色とりどりのネオンに輝く遊園地が町の各所にあつて、メリーゴーラウンドや観覧車を楽しむ人で夜更けまでにぎわう。

成人学級

1978年10月17日に国勢調査が行われた。当日は交通機関はすべて止まり、国境も空港も閉鎖。イラク人はもとより、外国人もすべて朝から夕方まで外出禁止。外出したものには罰金まで用意されていた。遊牧民のベドウィンは空からヘリコプターで追跡。文盲率19.6%と判明。その結果、文盲追放キャンペーンが国家的事業として展開され、15歳から45歳までの文盲の男女を対象に、成人学級が開設された。

児童センター

バグダッドには立派な児童センターがあり、音楽会や児童画展が行われる。日本の子どもの絵と比べて、イラクの子どもが好んで扱う主題は、三つ星を配した三色旗、イラクの国旗や、銃を持って戦う兵士の姿、戦車、油田のやぐらが目立つということだ。

盲学校

盲学校を見学する機会があった。建物は新しく近代

的だったが、設備のほうは発注した教育機材がまだ届いていないということだった。最近まで盲人用のつえを使う習慣がなく、指導者も少ない現状で、弱視生徒と全盲の生徒が腕を組んで2人1組で行動していた。将来はつえを使い、独り歩きができるようにしたいと、案内の校長先生は話していた。全校生徒140人中110人が寮生活を送っている。一般教科のほかに職業訓練も行っている。男子はとうの家具作り、女子は良い主婦になるための家事の勉強に力を入れている。教室には家庭で使うスパイスや食料がたなに並び、においや型で覚えるようになっている。家畜のはく製もある。びん詰の劇薬もなん度もかがせ、徹底的に覚えさせる。ゴム製のさそりや毒へびもあるが、触ってからでは手遅れになるものだけに、かの女たちの安全を願わずにはいられない。

成績の良い者は大学に進み、卒業後、母校で教べんを取るケースもある。見学に行ったとき、そうした先生のところに初めての子ども誕生の電話がはいり、全校が喜びに沸いた。同級生だった夫人は「これからはこの子が手を引いてくれる」と大喜び。成人のための職業訓練も同校で行う。そこで知合った同士で結婚、妻2人をもつ者が多いという話だ。イラクでは回教徒でも、第一夫人の同意がなければ第二夫人はもてないので、特殊なケースだろう。

大学の入試、入学後の試験にも口述筆記者が大学側から付けられる。案内して下さった校長先生と擦れ違う生徒はみな、かの女とわかってあいさつをする。先生はひとりひとりに応じながら、「香水と足音でわかるのですよ」と、笑って言われた。先生は校門まで見送って下さった。

スペインの国柄と子ども



か 香 川 純 子
元 在マドリード

スペインの教育制度

スペインは個人の信教の自由を認めており、新教徒もいるが、きわめてわずかであり、ほとんどが国教のカトリック教信者である。最近、その影響力は徐々に弱くなってきたものの、依然強い勢力を保っている。特に地方へ旅行するとわかるが、貧しい小さな村や町で、教会だけはその村や町の貧しさに関係なく、周りの家々と不均衡なほど立派なものが、ほとんど例外なく建っている。主都のMadridでも聖職者の姿がやたらに目につき、その勢力の強さを物語っている。

教育面においても、ついこのごろまで、一世紀以上もまえの1857年の法律に基づいた、教会色の濃いものがあった。教会とは切っても切れない状態であった。現在、スペイン政府は経済社会発展のため、現代に即した教育制度に改めた法律を、1970年に成立させた。これは1971年から1980年までに、新教育制度への切換えを完了することを目標に実施されつつあり、今ちょうど過渡期にある。



マドリード市街

新教育制度はeducación preescolar（幼稚園、2歳～5歳、就学義務なし）に始り、educación general básica（日本の小学校に当る、普通基礎教育、6～13歳、義務教育）へ進み、その成績により título de graduado escolar（修了の称号）か、certificado de escolar（修学証明書）を受ける。前者を受けた者はbachillerato（中等科、14～16歳）へ、後者を受けた者はformación profesional（職業専門養成学校、1～3年課程）へ進む資格が与えられる。

中等科を終えて título de bachiller（中等科修了称号）を得ると、curso de orientación（大学予科、1年間で生徒の進学のオリエンテーションをする）または職業専門養成の第2課程への進学資格が与えられる。

一般生活

一般社会の生活については、カトリック教の教えに基づき形成された道徳を基盤とし、毎日の生活を楽しんでいる。特にかれらの生活において食べるということは、最大の関心事であり、その量も多く、費やす時間も長い。またほとんどの人が家族とともに食事をす

る。学校に行っている子どもはもちろんのこと、働いている人々も家に帰って食事を取る。昼食もその例外ではない。そのためスペインの昼休みは2～3時間ぐらいあり、住いも職場に近い所にあるので、それが可能である。

このようにほとんど毎食を家族とともにするので、食事の場が家族の交流の場となり子どもの教育の場となる。教育程度の低い現在のスペインでは、子どもの人間形成は、学校教育よりも、家庭の生活を通して行われている。

親代々伝わった生活信条がひとりひとりの子どもに強い影響を与えているのである。バス・電車に乗っていて、若者のみならず子どもまでが、自然に進んで老人、幼い子どもを連れた婦人に席を譲るなど、老人や婦人をいたわるといふ気持は、システム化された学校教育によって得たものではなく、家族との生活を通して得た動作の現れではないかと思う。

子どもとその遊び場

田舎は別として、都市の住居形態はアパートの形式であるため、庭付きの家などはない。そこに住んでいる子どもは学校から帰ってから、道路以外のあらゆる空いている場所で遊ぶが、スペインの都市にはちょうど日本で小・中学校が一定の区域ごとにあるように、大小の公園が点在していて、遊び場に困らないようになっている。子どもはそういう場所で、日が落ちるまでめいっぱい遊ぶ。男の子はサッカー、女の子はゴム飛びやスペイン風の石けりなどをして日を過す。かれらは学校以外の場所ではあまり勉強をしないようであり、親が子どもに勉強を強いる場面に出合ったことはなかった。

余暇と休暇

元来、スペイン人は働くために生きるのではなく、生きるために働くのであり、その就業態度にも、働きばちといわれる日本人には想像できないような面がある。

就業時間が終わると、やりかけの仕事であってもそのままにして、家に帰ってしまう。そして夕食までのひとときを家族とともに、近所のカフェテリアで、種類の豊富さを誇るスペイン独特のつまみものを食べ、ビールやワインを飲んで過す。

この時もむろん子どもは一緒にあり、おとなたちとの会話を楽しんだり、子ども同士で話を



女の子たちと筆者

したり遊んだりする。

このチャルラ（おしゃべり）はかれらスペイン人にとってたいへん楽しい時間で、家族内の交流もさることながら、家族同士の交流の場でもあり、この場で子どものこと、お産の話など、いろいろなことが話される。経験者や年寄りが、若者たちにその豊富な経験を伝えていく、おとなが子どもに、年寄りが若者に教育する場でもある。

スペインにおける休暇は、働き始めた年から、年間最低20日取ることができるほど恵まれたものであり、その休みをむだにするなどは絶対ない。貧富の差がまだかなりあり、その過ごし方はさまざまであるが、各人がそれぞれの休暇を十分楽しんでいる。

スペインの祝祭日は地方によって異なるが、全土の祝祭日を合せると一年中休みで、働く日がなくなってしまうほど多い。全土共通の祝祭日および冬・夏の休暇を入れると、年3回大きな休暇がある。春のSemana Santa（聖週間）、夏の休暇、クリスマスから新年にかけての休暇である。

聖週間・クリスマス・新年の休暇には、多くの人々が自分の故郷に帰り、そこで、その地の祭日を家族とともに過すことが多い。

夏は自然の少ない都会生活を強いられている人々にとって、自然と接するよい機会であり、海や山へと出かけて行く、人口がそれほど多くないこの国では、外国人の集る海のある有名なリゾート地域を除いては、人々でごったがえすということはまずない。そういう自然のなかで、家族で一日中なにをするわけでもなく、ボーッと過す。

このようにスペイン人の生活をみると、常に家族と



マーケット

ともに行動し、楽しみ、その場を通して話合い、自然と親が子に教育を施していく、精神的に余裕のある、恵まれた環境にあるように思われる。

お産について

この国でお産をする場合は、日本と違って医療保険が利く、保険は大きく分けて、社会保険と個人的に加入する保険がある。職業をもたないわれわれ外国人は、社会保険にはいることができないため、個人的な保険にはいるしかなく、私どもも、もしもの病気に備えて個人的な保険にはいていたが、お産のときに役に立った。ただしお産の場合は、出産予定日より1年前にはいっていないと、その恩恵に浴することができない。保険に加入せずにお産をすると、通常分べんで10～15万円かかるが、夫婦で保険にはいている場合、月々約1,300円の保険料支払いなので、最低15,600円でお産ができることになる。

個人的な保険の場合、ある医療保険会社の保険に加入すると、その会社のさん下にたくさんのクリニック（診療所）が地域ごとに点在していて、いずれのクリニック

でも診察を受けることができる。また入院治療が必要な場合は、入院施設をもったその会社の病院へ回してくれる。

日本のように診察・治療・入院が一度にできない不便な場合もある。たとえば、風邪をひいたときなどはまず近所の診察所に行き、病気の種類を診てもらい、薬・注射の必要があれば、そのの医者処方せんを書いてもらい、薬局に行って薬を求め、飲んだり、塗ったりの場合にはいいが、注射の必要があるときは、診察した人とは別な人がいるので、薬局で買った注射薬を持ってそこまで注射してもらいに行かなくてはならない。ちょっとした病気の場合は、かえってつらい思いをすることになってしまう。

さてお産の場合、初診で妊娠であるとわかると、まず血液検査から始まり、もろもろの検査をしたのち、問題がなければ臨月まで、月に1度検査に行けばよい。しかし妊婦をもった家はたいへんである。ほとんどの人が必ずだれかに付添われてくる。待合室には、用のない夫や母親などの家族がうろうろしている場合が多く、必要以上に診療所がこみあう。いよいよ予定日が近づくと、入院の予約をしておき、お産の徴候が現れると、病院に連れていく。個人保険の病院の場合は、病室が全部バス・トイレ付きの個室で、ホテルの一室のようにきれいであるが、スペイン人の産婦人科医の技術水準は、あまり高くないようである。私の場合、双子であったにもかかわらず、分べん寸前までついにそれがわからずじまいであった。

おわりに

スペインは40年前の内乱により経済が極度に疲弊し



マドリードの子どもたち

た、第2次世界大戦中は中立の立場を維持したものの、フランコによる独裁体制を非難する多数国から白眼視され、一切の国際政治・経済機構から締め出され、まったく自力で復興し、工業化に着手せざるを得ない苦しい立場におかれた。

その遅れを取りもどすため、最近、経済発展計画、教育制度の改革などの近代化に取組み、目覚ましい発展を遂げている。それに伴い、カトリック教思想を中心とする体制が崩れだし、家族形態も大家族から核家族に移行しつつあるので、今までのような、家族による教育の場がどんどん失われ、過渡期における不安定状態にある。

それを乗切って近代化に成功し、今までの教育制度の良い面を取入れた、新教育体制を早く作りあげることが、スペインの今後の大きな課題のひとつのようと思われる。

過去40年間にわたる、フランコ独裁体制の閉鎖的な状態からスペインは今、世界に大きくはばたこうとしている。その長い歴史と愛すべき国民性を失うことなく、子どもにとってより良い国になって欲しいと思う。

アラスカ州エスキモー の暮らしと子ども



武 藤 静 子
日本女子大学名誉教授

はじめに

はじめにこの報告文の情報源を明かにしておかねばならない。1976年夏、2週間のアラスカ旅行を計画したとき、エスキモーの食生活、特に子どもの食生活に焦点を絞って見てみたいと考えた。出発前に在京のアラスカ州政府機関に向いて目的を話し、最も有効と思われる方法として、エスキモー村の村長さん、あるいは学校の先生に紹介していただけたらとご相談した。

しかし「白人があいだにはいると、本当の姿は見られない、エスキモーは人懐こい人種だから、じかに友人になるほうがよい」と勧められた。

そこでなんの準備もなしに出かけたが、陸に行くには飛行機以外にないという遠隔地のエスキモー村でさえ、かなりアメリカナイズされており、さらに舟で数日、チャーター機で1~2時間のエスキモーキャンプまで行かないと、伝来のエスキモー生活は見られないという。そこまでの時間的余裕もなく、またエスキモーの英語はなんとも聞き取りにくく、2、3人のインテリ

エスキモーを除いては、白人の説明にまつよりほかなかったもので、その範囲の報告であることをご了承いただきたい。

カツビューにて

アラスカで2番目に大きいエスキモー村カツビューは、北極圏の北48km、ベーリング海に面したツンドラ地帯にあり、私の着いた8月19日には、ツンドラを覆う草はすでに黄ばみ、外出にセーターやスカーフを必要とした。海岸に沿って物置小屋のようなものが並び、木舟がいく隻かもやい、そのあいだを日本人によく似たおとなや子どもが往来しているところは、ものさびれた日本の漁村を思わせる。

物置小屋に見えたのはあとで住居とわかったが、家ではちょうど日本で洗たく物を干すように、さげやくじら、野獣(カリブー、レーンディアなど)の皮を干して、冬に備えている。屋根に野獣の角などをたくさん飾ってある家もある。

村民の90%がエスキモー、あとの10%が白人の、ホテルや銀行のマネジャー、学校の先生、病院の医者な



文明化された家

どで占められている。

私が泊っていたホテルのガイドマネージャー(白人、本職はワシントン州にある大学の外国人学生カウンセラー、夏のあいだ、この仕事は気分転換にいいという)は、私の旅行の目的を聞き、知限りのいろいろの話をしてくれた。たとえば、白人はエスキモーのなかにアルコールや結核を、子どものあいだに甘い菓子やほ乳びんで飲ませるコ



エスキモーの遊園地。フェアバンクス

ーラやドリンク類をもち込み、むし歯が急速にはびこっている。このため病院(医師4人、看護婦7人)や保健所で健康指導をするようになり、生活指導の建物も今、建設中である。病院では毎日午後3時に救急の電話受付などもしている。しかし、かれらの生活を元にもどすことはできない。いったい文明・文化・福祉とはなんだろうかという疑問をも混じえて。

しかしエスキモーの子どもがなにを食べているかには答えられず、大急ぎで近所に遊んでいた子どもたちを集めてきて、おまえはけさなにを食べたかとか、学校給食はどうかなどと、ひとりひとりに聞いてくれたりした。聞いた範囲では、朝はセリヤル・パン・ミルク・卵・果じゅう、学校給食はミルクとサンドイッチなどで、一般のアメリカの子どもとあまり違わない。

かれはまた、老夫婦と孫2人で住んでいる、ずっと離

れた、観光用のエスキモーキャンプに連れていってくれた。人影のない砂浜に紅鮭(べにざけ)がいく重にも干してあり、さらに2人で次々と鮭を下ろしては干し続けていた。朝、網を張り、夕方、かかった魚を舟で獲ってくる。土を3フィートも掘ると氷なので、2週間干したあと、ここに貯える。もっと深く掘れば凍結する。海辺に張ったテントのなかはとても明るいし、寒くない。天井の明り採りに獣の腸内膜が使われており、雨は漏らないし、寒いとき火を燃すと、そこが煙出しになる。冬はこの場所を引揚げて、カツビューに住む。家族12人、犬ぞりで猟に出たり氷を切りに行く。氷の溶けた水はとてもおいしいという。

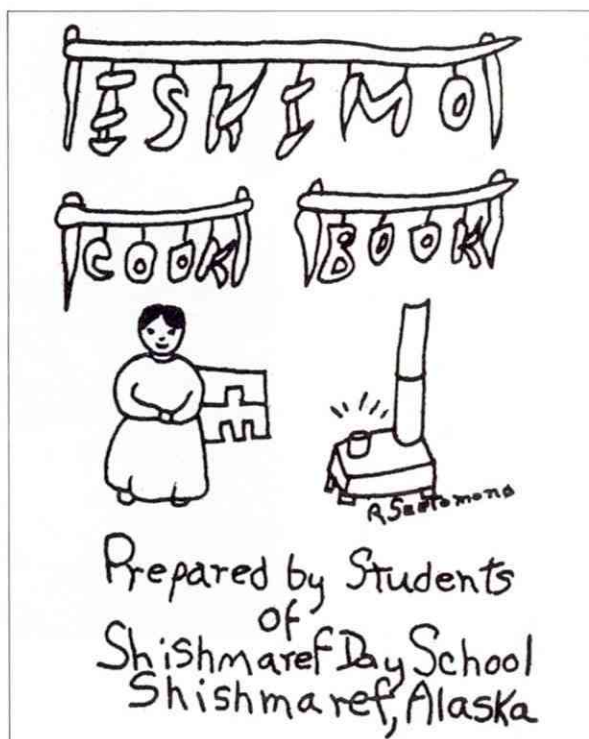
次に、時間を約束してお会いしたのは、村の保健婦さんで、本土で教育を受けたエスキモー。保健所は保健婦・保健助手・タイピストの3人からなり、指導は

曜日により妊婦・乳児・家族計画・結核・性病などと決められており、それぞれにパンフレットが用意されている。若い人たちは英語で教育されているので、本土で使われているものが大部分そのまま役立つ。食生活は今ほとんど白人と同じになったが、あざらし・くじら・せいうちなどの肉を乾燥し、そのままあるいはあざらしの脂につけて保存したものは、今でもエスキモーの好物で、特に古くなったあざらしの脂は一種特有のにおいになり、これにつけた肉は考えただけでもよだれが出るほどだという。

エスキモーは大部分が母乳栄養で、離乳時にはベビーフード製品を使っている。パンフレットのなかに、夏のあいだツンドラの表面に生育する植物やかん木の実（ブルーベリー・ブラックベリー・その他）で、食用になるもの27種の絵と名称を示したものがあつた。夏のあいだは生で食べ、冬のあいだに冷凍させる。

保健婦さんの案内で英語を話せるエスキモーの家を訪問した。ペンキ屋さんという特殊技能のせいか、エスキモーのなかでは経済的に豊かなほうのようで、家も他よりは明るく、部屋数もあり、立派である。ご夫婦と子ども7人、高校1年の娘さんには満1歳になる赤ちゃんがいる。かの女は村の高校に行かず、フェアバンクス（飛行機で約30分の町）の高校に行っている。ちょうど夏休みで帰ってきていたが、学校のあるあいだは祖母が面倒をみている。

奥さんが冬のために保存してある大きなたる入りの肉の脂づけや、植物の脂づけを見せてくださった。肉は脂のなかでちょうど生肉のような状態になっている。脂のうえに出ている部分を食べてみて、ちょっとにおいがかかしくなっているといいながらつかみ出し、大



栄養指導のパンフレットの表紙

きなビニールの袋に入れ、冷凍庫に納めた。獣の皮もなん枚か乾燥させてあり、これで冬用のくつやオーバーを作るとのこと。

道で会ったおばあさんにあいさつをしたら、そのおばあさんはニコニコして私と腕を組み、自分の家に来いと誘う。暗い小さな入口をはいると、小さな窓が1つある部屋に、いずれも古ぼけた流し・食品だな・ストーブ・ソファ・テーブルなどが雑然と並び、妙なおいが漂っている。奥におじいさんが寝ている。

狭い部屋に2人の若い女性がソファに身をもたせ、たばこをふかしながら、音楽のレコードを次々にかけている。ご主人は働きに出ており、奥さんのほうはこのようにして日が過ぎるのだろうか。子どもが3人、

私の折ってあげた紙風船を片手に、かんジュースを出して飲んでいる。そのうちに若い男性一息子かもしれない—がはいってきて、戸だなからパンのようなものどゆで卵2個を取出し、立ったまま食べて出ていった。なにしろおばあさんの言葉はほとんどわからず、あとはだれもしゃべらないので、パントマイムを見ているようである。

パローにて

パローはアラスカ最北端の北極海に面したアラスカ第1のエスキモー村。ここに着いたのは8月26日、大きな毛皮のフード付きの外とうを着ないと、外に出られない。ホテルには客用にたくさん備付けてある。ここは近くに油田がある関係で、カツビューよりずっと都市化が進み、人口が急増した。水不足が深刻で、夏のあいだはツンドラの表面が溶けてできた湖水の水をバキューム車でくみ上げ飲み水として各戸に配給している。家のまえにごみバケツと並んでふた付きのきれいなバケツがおいてあるのは、その水用である。

ガイドさん（白人）の話によると、ツンドラのした



北極海に面した海岸、アラスカ最北端のパロー



戸外でひなたぼっこ

3フィート以下は夏でも凍っているため、下水処理はさらに深刻な問題である。大きなガロンかんに詰めては北極海のかなたに捨てていたが、数年前大暴風雨のとき、それらが岸に打ち上げられて破れ、たいへんな騒ぎであったという。

学校はもう始つていて、私が訪れたとき、子どもたちははらんこや遊動円木で遊んでいた。保健の先生（白人）の話で、最近子どもの健康上の問題が多い。男女を問わず親のあいだに飲酒が広まり、育児放棄がふえている。食事さえちゃんと与えられず、子どものあいだに貧血や立ちくらみがふえ、水不足も手伝って不潔に放置されるので皮膚病がまんえんし、化のうしやすく、また結核がふえている。砂糖消費の増加に伴ってむし歯がふえ、14歳で前歯が全部なくなるような子どももいる。それにしてもお酒を買うお金はどこからくるのかを私がいふかると、この地域は油田地帯を白人に明け渡したため、エスキモーには1人当り年額2,000ドル（この数値は確かでない）が支給されるので、働かなくても生活できるのだという。それに学校・病院が全部無料、漁も猟も自由などの保護政策が採られている。

ブラジルの子ども

一日系の子どもの生活と問題点—



横山定雄

武蔵大学教授

明るさと貧しさのなかで

ブラジルは明るいラテン系社会のひとつ、いつでも「ボンディア！（こんにちは）」と、子どももおとなもくったくなく明るく、人生を楽しむために生きている。2月のカーナバルともなると、サンバのリズムに踊り狂って夜を明かす。

私の滞在は夏休みの時期でもあったが、子どもは暇に任せて公園や空地でボールをけり回し（フットボール）、下町のレストランで家族連れの子どもの、大くしの焼肉をばくつき、バー（スタンド式バー）や街角では夜遅くまで、青少年男女がギターや歌で青春をおう歌している。

だが裏町の空地や町外れの川土手には、電燈も水道もない掘立小屋の密集スラムが至るところにあり、都市流入の貧困失業者がどんどん住みついていく。その子どもたちは稼ぎや遊びを求めて、近所の養鶏や鶏卵をかつばらい、歩行者にすりや強盗を働き、道路や交差点で乗用車に殺到して物を押売り、フロントガラ



青空市場、日系人の出店も多い、サンパウロ

スを勝手に拭いては金銭をせびる。

「明るさと貧しさのなかで」——ブラジルの子どもに対する私の第一印象は、これであった。

ところで経済成長の中進工業国といわれるブラジルは、日本の約23倍の広さを持ち、熱帯高温多湿の未開ジャングル、広々した半砂ばく平原、耕地や都会の多い高原丘陵などに、ポルトガル植民地以来の多人種混血1億2千万人が、貧困から富裕、原始から文明のあいだで、落差の激しい多種多様な生活をしている。

私は昨年、北米や欧州を回ったあと、11月から夏期3か月をブラジルで過ごし、都会に耕地にアマゾンに、主に日系人の生活や苦闘のあとを訪ね歩いた。

文盲撲滅政策と稼ぐ子どもたち

ブラジル政府は'64年革命以来、文盲撲滅を重要政策に掲げ、学齢期児童の就学率向上に力を注いでいるが、激しく都市流入する貧困労働者の、子どもの就学や教育に対する関心の低さと、小・中学校（グルッポ、小・中各4年制）数の絶対的不足（短時間の2部・3部授業制）に妨げられ、成果はあまり上がっていないという。

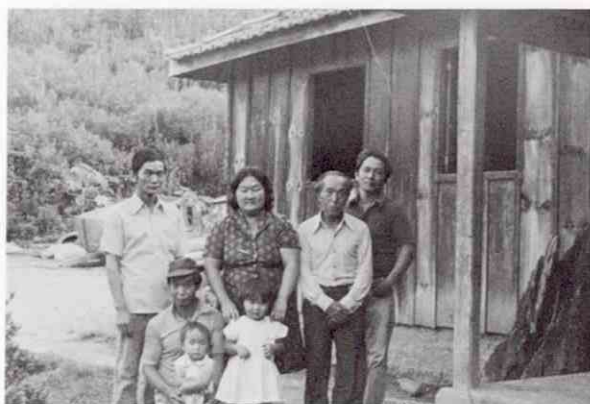
とにかくかれら子どもたちは、文字は知らなくとも金銭の計算だけは有能で、決して損をしないセンスを身につけている。そこで稼ぎを求めて乗用車に押売りしたり、青空市場（フェイラ）などでおとな顔まけの働きをする。私が泊っていた民宿のまへの道路でも毎金曜日午前には食料品フェイラが開かれ、早朝から子どものかん高い売声がした。それは今でも耳に響いている。アマゾン河口のベレン市の魚市場で、客にビニール袋を売りつけて回っていた「はだしの少年」たちの姿を思い出す。

最近サンパウロ市では「トロンバンジニヤン」と呼ばれる少年集団暴力すりが横行し、毎日、新聞や話題をにぎわしている。私も一度その襲撃を受けた。幸い実害がなく、思いがけずよい経験(?)をしたに過ぎないが、「東洋人街」の住人や歩行者のなかには、再々被害を受けた人もいる。警察は取締りに苦心しているものの、実効は上がっていない。

まじめによく働く日系人

ブラジルで70余年の移民苦闘史をもつ日系人は、現在75万人といわれ、日系進出企業関係者を加えるともっと多くなる。日系2世から大臣・議員・大学教授なども生れており、日系人もやっと余裕と自信がでてきたところ、子どもはすでに3世・4世の時代である。

「日系人はおとなしいが、まじめで正直でよく働く」というイメージや評判は、現在の子どものにも十分受継がれている。銀行・商社・商店などで働いているたくさんの子日系男女青少年のなかには、昼夜2か所で働いているとか、夜は大学で勉強中、という勤勉な子どもがたいへん多い。



丘陵耕地の日系人

サンパウロ市やアマゾンのベレン市でも、青果物食料品の中央卸市場では、日系の業者や農民が活躍しているが、家族と一緒に働いている小さな子どもの姿も目につく。

ナタール（クリスマス）の直前、私はサンパウロ市から西北西へ、夜行急行バスで10時間余りの平原奥地のG市とP市に出かけ、近くの日系農家や集団農場を訪ねた。ここに、武者小路の「美しき村」やキリスト教力行会の精神に基づく共同経営集団農場の「Y農場」と「S農場」がある。

私はS農場に泊めてもらったが、10人余りの男女青少年が、農場耕作は男子、養鶏・養豚は女子、青空市場出張はだれだれ、というふうに分担協力し合い働いている姿が印象的だった。

1月にはサンパウロから西へ車で8時間余りの、「ブラ拓(ブラジル拓殖会社)」の町として有名なB市を訪ねたが、歓待して下さった雑貨商のM氏宅では、7人の子どものうち、確か3人の子どものが次々と資格を取って、自宅で共同の会計事務所を開設、3世代20人同居の大家族生活を展開し、3世の孫たちもみんな仲よ



ナタール（クリスマス）祝会の踊りの練習，S農場

く家業や家事を手伝っていた。

モダンバレエと農村児童文化

話をもどしてS農場では、ちょうどナタールまでで、夕食後、子どもたちは幼児も混じえてナタール祝会舞台の総練習、日本語のせりふに話しても楽しそうで、豆や芋の布袋を劇衣装に改造し、子どもたちの演技はなかなか見ごたえがあった。翌日P市に2人の修道女を訪ねたが、ここの教会では子どもも親も総出演で楽しいナタール祝会が開かれた。

ところでG市近くのY農場では、数年前から子どもによる見事なモダンバレエ団が育っており、移民70年記念祭にも出演、日本へも公演に出かけて大評判だったという。私は惜しくも見学の機会がなかったが、S農場やP市の教会で、子どもの熱心な演技を見た私としては、農民や子どもが切に求める文化的・創造的欲求にこたえたものとして、心から賛辞を呈したい。

いっぽう、サンパウロ市郊外に「瑞穂（みずほ）村」という日系植民地がある。ここにはこの村の日系人が

寄付した「ミズホ」という名の新築の公立小・中学校があり、日系の子どものほか、イタリー系など混血児童がたくさん通学している。

45年前この村を開いた日系1世たちは、自分たちの子どもを、近くに住むカポクロ（混血原住民）のような無教育に育てたくないとの願いから、入植以来、日本語禁止の戦時もひたすら日本語学校を経営し続けてきた。その苦闘や執念が、寄付した新築学校に秘められているのだという。

大学進学と世代間のかつと

最近の日系人の自慢のひとつに、日系の子ども（2世・3世）の大学進学率や入学率の高さと、その成績の良さがある。日系人口はブラジル全人口の0.7%だが、ブラジル公・私立大学生の10%~15%を占め、医薬系・理工系・経営系の合格者が特に多い。

この国では大学卒業者は「ドットール（博士さま）」と呼ばれ、有力な職場や専門領域から高給で迎えられ、社会的・経済的成功の早道となっている。耕地生活で長年苦勞してきた日系1世・2世のなかには、農地や



日本語学校の健康診断

家財を手離して子どもとともに都会へ転住し、子どもの大学入学や将来の出世にかけるといふ例が最近ふえているという。

ところが悲しいことに、親が家産をはたき、子どもが大学に入学した、ドットールになったという家庭で、思わぬ世代間のもつれや悲劇が続発し、日系社会の大きな問題になっている。それは奥地農村で子どもを日本の感覚で育て、すべてを子どもの大学入学にかけ、親孝行や幸せな水いらずの生活を夢見ていた親や年寄りを、息子や娘がどういふわけか一方的に疎外し拒否するようになり、泣かせる例が出てきたという。

息子や娘からすれば、子どもは成人すれば親から離れて自立生活するのが当たり前、結婚相手も自分が見つけて決めるものだし、結婚相手が「外人（非日系人）」か日系かは問題にならない、それよりも、服装やなりふりをかまわず、ブラジル語（ポルトガル語）も十分に使えない無教養そのものの親が、自分の親として恥ずかしく、人に見せられず、拒否したくなるという。

まことに悲しい世代間文化かつうだが、問題の解決には時間が必要のようである。

国際交流と子どもの将来

ブラジルでたいへん世話になった友人の妻君Sさんは、小学校教諭の経験を生かして、サンパウロ市で日本語塾をやっている。私は卒業式兼修了式に招かれ、子どもたちと話したが、日本語は難しいと困っていた。

日系の子どもは、幼児期はともかく、就学するとブラジル人としてブラジル語を積極的に話し学ぶようになり、日本語は耳で理解できるだけのになってしまう。親や年寄りに勧められ日本語塾へ通うものも多いし、



S農場の昼間の留守部隊

大学時代に日本の国や都道府県の奨学金で日本へ留学する機会もあるが、一般には日本語学習は重荷になり、親や年寄りを寂しがらせている。

ところで子どもにとっては、日本語よりも、将来がどう開かれているかが大事な問題である。そしてこれは、都会の子どもよりも、奥地に住む子どものほうがもっと深刻である。

私はサンパウロから西南へ車で5時間余りの丘陵地帯の寂しい一軒家で、3人と4人の子どもを育てながら、非日系農業労働者を多数雇って、価格不安定なトマト（トマト）栽培と闘っている戦後移民の2家族を訪ねたときを思い出す。

電話も電燈線もない人里離れた大自然のなかで、子どもたちは非日系の子どもたちを相手にたくましく育っていたが、ブラジル語も日本語も十分に学習できる機会がなく、子どもにとって将来になんの保障もない世界に住んでいる。これが、戦後日本が奨励し推進したブラジル新移民と子どもに対する仕打ちの実態である。国際交流を目差す日本人として、考えてみるべき問題がたくさんあるようである。

ニュージーランドの 少年非行対策



なげ かわ あし
武 川 篤

国立きぬ川学院調査課長

国土と国民性

ニュージーランドは北島、南島およびスチュワート島、そして周囲に点在する島々を含めて面積約268,700 km²、北海道を除いた日本とほぼ同じくらいで、人口は約310万人である。したがって人口密度は低く、ゆったりしたふんい気に包まれている。この国はひとりひとりの生活を大切に、合理主義に徹し、平等主義（公平な分配）をモットーにした国民性で、卒直・誠実・勤勉の3つを大切に、落ち着いた親切な国民という印象を受けた。

このことはマイホーム主義的気質の国民性にもつながり、午後5時の勤務を終えると、まっすぐ家に帰り庭木の手入れ、家具や家屋の修理などをしたり、休日には家族連れのパクニックやハイキングなどもする。また家庭相互間の訪問・交流も多く、時には簡単なパーティーなどを開く。農村部では家畜の共進会や農産物の品評会などが行われる。発達した牧畜産業による酪農製品、温暖な気候に恵まれた新鮮な野菜や果実、周



オークランドの公園

囲を海で囲まれた海産物などで、食料は多彩・豊富であり、一家だんらんしてゆっくり食事を取る。

週休2日、週労40時間が守られていて、幼少のころからスポーツを盛んに行っている。スポーツにかけているといっても過言でなく、青少年のうち60%が、各種のスポーツクラブに属している。ラグビーをはじめ、クリケット・サッカー・陸上競技・水泳・ボート・ヨット・サーフィング・釣・登山・ハイキング・スキー・ゴルフ・ローンボリングなど、広い国土に屋外のスポーツ施設が充実している。スポーツに対する考え方は、幼児から老人まで、だれでも参加できるということである。

教育の目標としては、自立できる人、個人の尊重と自尊心をもって有意義な社会生活を送るということで、人間は教育程度によって評価されない。したがって学歴社会ではなく、ハイスクールを卒業して4～5年技能を修得すれば、生活できる給料が得られる。また教育は幼稚園から大学までほとんど無料である。大学へは、行く能力があって、勉強する人が行けばよいという考え方である。

社会保障が発達していて、現金給付として、年金以外に10種類以上の給付がある。医療は無料、教育もほとんど無料で、給付の費用は一般会計の25%で賄われている。この高い保障はニュージーランドが、新天地を求めて体ひとつでイギリスその他から移民してきた人たちからなる国であるため、徹底した平等意識が強いことと、人間を大切にする観念が発達しやすいことによるものと思われる。

非行と問題点

このような広大な国土と国民性、また余暇の健康的な利用、教育や高い社会保障の行届いた国でも、新しい社会的な課題が生れている。時代の進展に伴い、非行はますます悪質化し、巧妙化の傾向を強め、また広域化、スピード化の度が高まるいっぽうである。

青少年の人格形成は家庭・学校・職場など、青少年の生活のあらゆる場面で形成され、一朝一夕で達成されるものではない。青少年の一部が家庭不和が原因で、人口の都市化現象に連れ、親から離れて仕事と刺激を求めて都市部に集り、そこで自動車窃盗を含む窃盗や、

麻薬の使用・所持などを起す。また各種の保障金が比較的簡単な手続きで受けられることが、保障金の詐取という形で現れる。

社会保障のうち離婚した妻、夫に逃げられた妻などに支給される寡婦手当のあることが、離婚の問題や10代の未婚の母などの問題を起している。未婚の母は世界で3番目に多い国である。

この国に最初に移住してきたマオリ系の人々と、ヨーロッパから移住してきた人々との社会生活の違いで、人種差別とは異った人種問題もある。

非行の処理

非行については専門的な人たちがばかりでなく、一般の人々や各種の宗教団体・関係機関が、力を合せて対策や処理に当たっている。軽度の場合また15歳以下の場合にはソーシャルワーカー・心理学者・精神科医などが協力し、里親制度が設けられている。だれでも気軽に里親を申出ることができ、家庭の養育を中心とし、健全な家庭生活が営めるような仕組みになっている。

ボーイズタウン (Boys Town Police & Citizens Club Inc.)

問題児を含めて、不幸な子どもや多くの子どもを集める目的をもつ、児童センターに類する施設がオークランドにある。歴史としては、ひとりのアメリカ人が資金の半分を出すから、市民も半分を出せば、ということで作られた。現在はオークランド地区で商売をしている人が資金を出し、市が運営している。職員は12人で、警察官が2人含まれている。学校ではない。学校が予約をとって、放課後や休日に利用したりして



マオリ族の教会



指導者と子どもたち

もいる。月曜日から金曜日までは午後10時まで、土曜日は午前10時から午後5時まで、日曜日は午後6時から10時まで利用できる。7歳から19歳までのだれでも利用でき、親と一緒にでもかまわない。

内部の設備としては、体育館（バスケットコート・バドミントンコート）・卓球場・ボクシングジム・スカッシュコート・プール・空手や柔道場・射撃場がある。また図書室・音楽室・テレビルーム・絵画教室・陶芸教室などもあり、ウェトリフティング・美術・音楽・写真・ダンス・ブラスバンドクラブなどがある。キャンプ用品の貸出しも行っている。

警察官は街を歩き、ディスコ付近などで問題児を見つけ、補導して連れてくる。

ここでの活動のプログラムは次の通りである。

①活動を通じて更生させる。

②ここにいる人が問題児を見つけた場合は、家庭を調べて、和解の処置を執る。

③ここで職業を探してやったりする。

④泊る場所がない場合は探してやる。

問題となる点は、問題児のグループと正常児のグループのバランスで、どちらかが多いと調和が乱れる。非行の種類や程度によっては、裁判に回し施設に収容する。

アロハタ・ボースタル式非行少女再教育施設 (Arohata Borstal Institution)

ウェリントンの近くにある施設である。アロハタというのはマオリ語で橋または塔で、ここと社会とのあいだに架ける橋を意味し、ボースタルは英国で非行少女の再教育制度を確立した人の名前である。110エーカー(44万54㎡余)の、芝生と少し起伏のある敷地に、塀もなく、ぎょうぎょうしい看板もなく、施設は建っている。1944年に創立された、15歳から20歳までの少女の再教育施設として、ニュージーランド唯一のものである。

当初15歳から20歳までの少年・少女用再教育施設兼拘置所として発足し、併せて婦人短期刑務所として使用されてきた。現在は少女のほか年長の婦人も収容している。これは年少の収容者に悪影響を及ぼす恐れが

なく、また夫や子どもと連絡を保つほうがよいと認められた者に限り、クライストチャーチ婦人刑務所に移送する代りに、アロハタに収容しているのである。

1976年中の訓練収容者は100人で、平均の収容期間は5～7か月である。これは長く置いておくと社会に適応できなくなるという理由である。

年齢別の収容者数は次の通り。

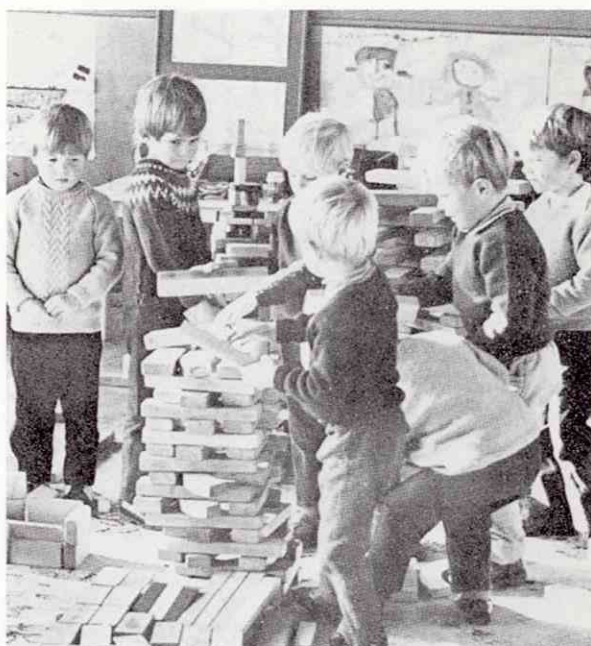
15歳	7人	17歳	31人	19歳	12人
16歳	27人	18歳	21人	20歳	2人

訓練収容者以外の服役者は68人で、刑期別服役者数は次の通り。

1か月	18人	6か月	16人	2年	1人
2か月	3人	9か月	4人	3年	1人
3か月	14人	12か月	2人		
4か月	7人	18か月	2人		

拘置者数は42人で、1976年の収容者合計は、210人である。

この施設は拘置施設であるが、重点は各収容者の社会的能力開発におかれている。少年期の生活のスタートが不十分であったため、身につけられなかった社会的能力を開発することに、教育と指導の最重点がおかれている。単に施設に収容しておくだけでは、このような社会的能力の欠陥を克服できないことは明らかで、社会的接触と、正常な家族関係また対社会関係のなかでの各人の役割を開発し、かつてなじんだ非文化的環境から切離して各人に自信をもたせることに、訓練の全プログラムの方向が定められている。職員の仕事は、個人の尊重と自尊心をもって有意義なやり方で良い社会的習慣を身につけることを、あらゆる機会を利用して手助けすることにある。勤勉な生活態度は技術能力



積木で遊ぶ子どもたち

を開発し、勤労の習慣を身につけるための最善の機会を提供するものであることを考えると、対社会的関係を改善し、自己・他人、他人の財産に対する理性的態度を養成するための矯正教育はむしろ第二義的のものである。

日課は次の通り。

6:30	Unlock.
7:15	朝食.
8:15	Work(農場・洗たく・庭園作業・調理・縫製).
12:00	昼食.
13:00	Work(午前と同じ).
16:00	レクリエーション.
17:00	夕食.
18:00	夜間教室(裁縫・らくやき・絵画・体育).
21:30	Lock.

リベリアの子ども

—貧しい現実と150人の大家族—



PATRICIA CLARK
パトリア・クラーク
アメリカ歯科医キリスト教伝道協会

リベリアの概観

私どもはアメリカから派遣されて、1972年から1978年までリベリアに滞在した。その間、夫は現地の教会の活動に従い、私は学校を開設し、校長として運営に当るなどした。それらの経験から就学前教育の必要が痛感されるので、そのため来月（1979年7月）再び現地に赴くことになっている。

リベリアはアフリカの西部に位置して大西洋に面し、アフリカ大陸の肩に止まっているおうむのような小さな国である。広大なアフリカ大陸ではつい見逃されてしまうようなちっぽけな国であるが、アフリカ最初の独立国（1847年）として意義深い。金・ダイヤモンド・鉄鉱石・ゴムなどの資源が豊富にある。

リベリアの海岸は真っ白い砂浜が波打ち際をくっきり描き、濃いエメラルド色の海が真っ青な空と溶け合いながら大西洋のかなたへと広がっており、そのすばらしい景色は地上最高のものといえよう。

またジャングル地区がかなりある。気候の関係で仕



公立女子中学校生徒のパレード練習、モンロビア

事の職種が非常に少ない。健康なおとなでありながらなにもすることがなく、一日中物陰に座ってぼんやりと過ぎざるを得ない人の多いのが実状である。なにが定まった仕事をもつことのできる人々以外は、貧困生活を余儀なくされている。

この国では1日1食が普通で、主食は米・カッサバ・野菜・やしの実から採れるオイルなどで、そのほかにいろいろなフルーツが豊富にある。しかし全般的にみれば栄養不足で、1日の食物を手に入れるのがやっとの生活を送っている人も少なくない。政府は計画的に農産・畜産物を育てていこうと働きかけ、他の国々から技術指導者が毎年来ているが、なかなか普及しない。

それは一つには水が少なく、たいへん暑い気候であり、未開発のジャングル地区が多いこと、もう一つにはリベリアの人々が長年一定の仕事をもつことができずに暮してきた習慣が抜けず、働くことに消極的な人間の多いこと、その2点に原因があるようである。国民全体に供給できる十分な食料を、国内で生産できるようになるまでには、もうしばらく時間が必要だと思われる。

リベリアの家族問題

現在のリベリアでは一夫多妻制度は法律上禁じられているが、現実ではまだ存在しており、普通の一夫一婦の家族構成よりも、母子家庭の多いのが実状である。この国の一夫多妻制というのは、他の国の場合と異なり、夫が複数の妻を養っているわけではなく、一時期夫婦として共に生活し、次に別の妻と一時期共に生活するというもので、夫が妻を変えていくたびに母子家庭がふえていく。

私がかつて村の婦人を5～6人集めて話を聞いたとき、そのうち4人の婦人が「私には夫がない」と答え、各人が子どもを2人くらい抱えて日々の暮らしにも困っていると言っていた。こうした習慣は多くの婦人やその子どもを苦難に直面させており、それは、今日リベリアが抱えている大きな問題である。

しかしながらこの国では、母子家庭であることは通常のケースであるため、社会的にハンディーとはみな

されない。したがって婦人たちも非常に自立心が強く、なんとか自分の力で子どもを育てていこうと努めている。その頼もしい姿は世界一かもしれない。

村の出産風習

リベリアに滞

在中、ある村で偶然お産に立会ったことがあった。モンロビアのような都会では、病院へ行ってお産をするのが普通であるが、村ではまだそういう習慣がなく、また病院がまったくないのである。

お産にはよく宗教的な儀式や伝統的・風俗的慣習がつきまとう。リベリアの村々で行われているお産も例外でない。

そこでは、妊婦がそろそろ産気を催すと思われるころになると、村に在る木造りの小屋に、村の婦人全員が集って、妊婦を真ん中に寝かせ、その足元に産婆さんが座る。婦人たちはその周りをぐるりと囲んで壁に背をもたれ、小さな生命がこの世に生れてくるのを、みなでじっと待っていた。夜通しまんじりともせず、ただ小声で声をそろえてなにやらブツブツと歌っている。お産がどんなに長びいてもだれひとり帰る者もなく、一心に出産の無事を祈り合う様子に、この村の婦人たちの強い同士愛が感じられた。

夜明け近くに突然、1人の男性が水差しを手に小屋のなかにはいってきて、口のなかいっぱい水を含んだかと思うと、苦しんでいる妊婦や周りの婦人たちを目かけて、なんとどなく水をブーツと吹きかけた。そして水がなくなると、黙って外へ出ていった。

外部者の私にはこの男性がなに者なのかわからなかったが、頭から水を吹きかけられても別に驚く様子もなくじっとしている婦人たちから察すれば、これはひとつの儀式であったと思われる。

夜明け近くようやく赤ちゃんが生れたときには、同席していたすべての婦人がいっせいに抱き合って喜んだ。こんなに大ぜいの人々に見守られ祝福される出産も珍しいものだと深く感心した。



竹を編む婦人と子ども

しかしこの世によく誕生した赤ちゃんは、産湯などにつからせることはなく、ある種の木の葉で体をふくだけで、じかに土のうえに寝かせるのである。私はびっくりして、家にあったタオルやシーツ、脱脂綿などを、衛生上良いからと手渡したが、決して使おうとはせず、かたくなに古い慣習に従おうとした。

お産と母子保健活動

都会へ出ていき高いお金を払って病院で出産するのは、かの女たちには確かに不可能なことであるし、村のこのような慣習から脱出して、たった1人で出産することは幸福でないのかもしれない。

そのとき生れた赤ちゃんは9か月で、天然痘で死んでしまった。先進国ではすでに地上から消えてしまったこのような病気であっても、この国では医療が遅れているため、人々の生活を脅かし、子どもの死亡率を非常に高くしている。

こうした背景を負い、近年、国や宗教団体などが各村に診療所を設け、母子保健活動に積極的に取り組み、衛生指導・栄養指導・定期健康診断・予防接種など、それぞれの地域の実状に基いた活動を行おうと努力している。

子どもの教育

リベリアは非常に文盲率の高い国である。最近ようやく小学校がミッションスクールとして数多く設立されたが、月謝が高く、生活にゆとりのある家庭の子どもしか通うことができない。公立の学校はまだ数えるほどしかなく、ボランティアにより青空教室のような形で補われているのが実状である。

この国には紙がたいへん少なく貴重なものとされている。長いあいだにわたる紙のない生活により、子どももおとなも書くという習慣をもたない。ミッションスクールで入学した子どもにクレパスと画用紙を渡したところ、それらの道具の使い方を知らず、生れて初めてなにかを書くという作業をした子どもがほとんどであった。おとなが書くという習慣をもたない生活環境で子どもが育つので、当然あり得ることだとはいえ、壁にも地面にも落書きひとつしよとしない子どもたちを見ていると、一日も早く教育がリベリアの国に万遍なく浸透することを望まずにはられない。

シスターの150人の子どもたち

私はリベリアに滞在中、ひとりのすばらしい婦人にめぐり会った。かの女の名はシスター・ビクトリア・B・ヤング (Victoria B. Young)。かの女には現在、なんと150人の子どもがいるのである。

リベリアには公的な養護施設はほとんどない。捨てられた子どもや親のない子どもは、ほとんどミッション系の施設にはいるか、比較的豊かな暮らしをしている家庭に、養子として、または使用人として引取ってもらっているのが現実の姿である。

ビクトリアさんの家は決して経済的に豊かではないが、ジャングルのなかに捨てられてさ迷っている子どもを、1人、2人と自宅に連れ帰っているうちに、いつの間にか150人もの大家族になってしまった。かの女は熱心なシスターで、リベリアの教会からの寄付金や、各関係方面からの日常必需品の寄付だけで、この大ぜいの子どもを養っている。

はじめ小さかったヤング家の建物は、みなで協力し



ビクトリアおかあさんの授業を聴く子どもたち

合って150人の大家族が住めるように改造し、さらに教室を1部屋設けて黒板を取付けた。ここでビクトリアおかあさんは子どもを年齢別に分けて集め、国語・算数・バイブル・音楽などを教えている。子どもたちは実に真剣に授業に臨み、だれもが文字の読み書きを覚え、大きな声で本を読む。150人の子どもはみな礼儀正しく朗らかで、ビクトリアさんを母として慕い、教師として尊敬し、すばらしい母親と大ぜいの兄弟がいることにプライドをもちている。

年上の子どもは年下の子どもの世話をやき、すでに成人に達した子どもも家に残って、ママのビクトリアさんを助けている。ひとりひとりの子どもがそれぞれ家事の一部を担当し、責任をもって働いており、家の周りの空地进行して作物を育て、井戸を掘り、花を植え、遊び場を造って、精神的に豊かな生活を送っているのである。

児童福祉を支える信念

ビクトリアさんが、なぜ150人もの子どもの親になろうと決心したのか、私にはその真意がとても理解で

きなかった。ところがある日、だれか引取ってくれる家を探して欲しいと、私のもとに1人の子どもが連れて来られたときのことであった。私はほうほうに間合せてみたものの、どこにも断られてしまった。それでビクトリアおかあさんを訪ねざるを得なくなり、かの女に事情を話した。私は「これ以上はとて無理です」という返事を予想していたが、かの女はそれとは反対に、喜んでその子どもの母親になることを承知してくれたのである。かの女はそのとき心からこのように言った。

「この子どもと私との出会いは神によって授けられたものです。ですから神が私に授けてくださった大切な子どもです。この子どもたちは将来、このリベリアの国を背負って生きていく大切な宝物です。その宝物を私はこんなにとくさん得て、育てることができるのですから、たいへん幸せです。」

私はビクトリアさんの本心を知って驚き、感動し、喜んだ。かの女の信念には、まさに児童福祉の精神が流れており、子どもを社会の子として、その人権を守っている。

かの女が、施設収容児ではなく、あくまで家族としてヤング家の一員にしている子どもを見てみると、先進国にも見られない真心のこもった福祉活動—かの女は福祉活動という言葉を使うと妙な顔をするが—の姿がそこにあるようで、リベリアの国のこれからの発展に明るいものを感じた。おそらくビクトリアおかあさんの精神は、150人、いや、これからもっとふえていく子どもたちに受継がれ、人間をなによりも大切にす、子どもを尊いものだとする思想が根付き、やがてリベリアの国中に広がっていくであろうから。(談)

クウェートと教育



あら かわ ひろ 子
元 在クウェート

クウェートの概観

クウェートは今でこそ「石油に浮かぶ国」と呼ばれて、その名は耳新しいものではなくなったが、20年前にはほとんど知られていなかった国、と言っても過言ではないだろう。アラビア湾に面し、イラクとサウジアラビアにはさまれ、石油によってまさに驚異的發展を遂げた、わが国の四国ぐらいの大きさの国である。



現代のクウェート

その小さな国土のほとんどはいまだにまったくの砂ばくで、人々はそのほんの一部分に住んでいるにすぎない。砂ばくのなかにしん気楼のようにたちまち立並んだビル群、6車線もある広い立派な道路、そして海水蒸りゅう設備で造られた高価な水をふんだんに吸った街路樹や緑地公園に、まず驚かされる。人口100万、そのうちクウェート人が約半数、あとは近隣諸国などからの外国人で占められている。エジプト・パレスチナ・インドなどからの労働力の流入が続いており、クウェートはさらに建設に緑化に、発展途上国として近代化していくものと思われる。

人々の生活

真夏は50～60℃にもなる猛暑の国である。人々は冷房完備の家で、真昼はひっそりと昼寝でもして暑さをしのぐ。涼しくなる夕方から、ショッピング・プール・パーティーなどが活気づく。高級車が世界でいちばんたくさん走っている国といわれるだけに、純金のナンバープレート・ドアの取っ手・飾りなどを付けて、ピカピカと輝きながら走る車や、片手に受話器を持って得意気に話している人を乗せて走る電話付きの車にたびたび出会う。

商店には世界の最高級品が、一見雑然としたなかに、ずらりとそろっている。テレビ・ラジオの普及率も目覚ましい。そのうえ、食料品のかん詰はもとより、きゅうり・トマトの野菜に至るまで、あらゆる商品が全部輸入という。それらのことから、きのうまでの砂ばくの生活が、一気に新しい生活へ向上した発展ぶりがうかがわれる。それもそのはず1人当りの年間国民所得は、スイス・アメリカを抜いて、世界第1位になっ



女子ハイスクールのキャンパス

た。今やクウェートは小国にして大国なのである。

しかし国民の約半数を占める近隣諸国からきた労働者層は、他国に比べれば恵まれているものの、冷房もない家に住み、決して楽な生活でない、というアンバランスのあることも、ひと言付け加えておきたい。

教育について

このすばらしい発展途上国にとって今いちばんの急務は、外国人のことでなく、クウェート人自身の指導者層の育成ではないかと思う。目下4444学制をしき、文盲をなくすことに力を入れている。教育費はもちろん、制服まで国が負担している。首都クウェート市の郊外には広大かつ立派なクウェート大学を建設し、諸外国から有能な教授陣を招き、若い頭脳を育成している。また外国に留学する者に対しては、費用の大部分を国が払うという熱の入れようである。

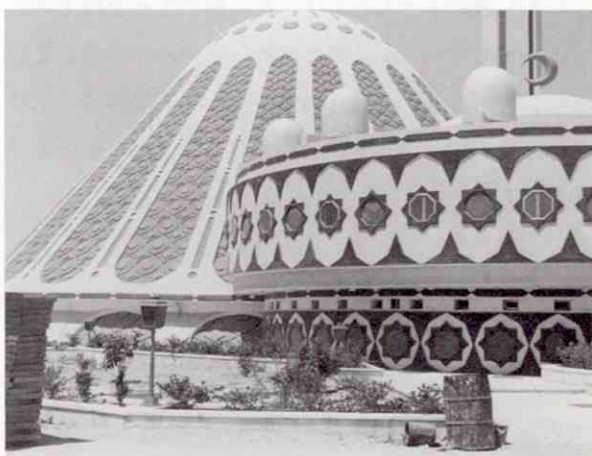
少しまえは、今の指導者層のなかにも自分の生年月日もわからない人がいるくらい、ほとんどの人が文盲であった。それに比べて現在では、砂ばくで羊の群を

追っていた子どもたちも、水色やピンクのユニホームを着て、毎朝、喜々として通学している。おとなが無表情なだけに、その豊かな表情は明るい未来を象徴しているようである。

福祉について

「福祉国家クウェート」の名のごとく、税金はなし、医療は無料である。出稼ぎの外国人でも、公営の病院では無料で診療が受けられる。しかし皮肉なことに、上流のクウェート人は公営病院でなく、さらに高級な個人クリニック、あるいはロンドンなどヨーロッパの病院に行くのが流行ですらあるようだ。

種々の施設も緑地公園をはじめ、動物園・遊園地・博物館・劇場・野外映画劇場・球技場など、ひと通りそろっている。スポーツはサッカーが盛んであり、そのほかハンドボールなどの球技が主流である。サッカーチームがゴルフ大会（アラビア湾岸諸国大会）に優勝したときの熱狂ぶりはすさまじく、国を挙げての応援・歓迎で、選手は首長（国王）に接見し、パレード



モスク



市民グラウンドでサッカーに興じる少年

で一躍英雄に祭り上げられた。若者たちは国旗を押立てて夜を徹し、朝まで騒いだ。そのなかに誇り高い国民性、若い息吹き、スポーツを通して青少年の健全な育成を図る国の意欲がうかがわれた。

しかし普段子どもたちは、長い服のすそを持上げ、広い空地でサッカーに興じたり、古タイヤ転がしをしたりしているし、若者（男性のみ）たちは海辺に三々五々集り、のんびりと語合っており、まだたいへんそぼくである。

イスラム教と国民性

アラブの国を語るのに、イスラム教を除いては語れない。クウェートでは、留学生などの外国帰り、外国人の流入による接触がふえ、その戒律はいく分緩んできてはいるが、まだまだ厳しく、男性は白い長い服、

女性は黒い衣をまとっている。禁酒国であり、ふた肉は禁止、映画館では一般席は男女別、モスク（回教寺院）は男性が占め、女性は後方の木格子の部屋からお祈りするという、いまだ男性中心の社会である。1日5回メッカのほうへ向いてお祈りをする宗教からか、なに事もアララーのみ心のままに、という宿命観・諦観、裏を返せば楽天的な性質が強く、インシャラ（神のみ心のままに）、マレーシュ（気

にしない）、ブクラ（明日）などの言葉が印象的である。

家庭と婦人

クウェート人はいろいろの機会に外国人の家庭に触れるにつけ、男女ともに一夫多妻制に疑問をもちつつあるようで、事実、クウェートでは一夫多妻は少ないといえよう。婦人は絶対に顔を見せないといわれたのは昔のことで、上層階級の婦人は、外国人を混じえたパーティーでは、美しいドレスを着て接待するまでになっている。砂ばくの過酷な条件のもとで強い男性の意見に従わざるを得なかった婦人も、余裕のある生活環境になって、子どもの養育をはじめ種々の問題に発言力を強めてきているようである。この傾向は留学後帰国した女性、高等教育で外国人教授に学んだ女性など、上層階級の女性から徐々に流れてきている。

国外に出るとき、飛行機のなかでさっと黒衣を脱ぎ、帰途は、着陸寸前に黒衣をまとう光景によく出会った。黒衣のしたは無表情でも、そして家庭のなかでの婦人の様子は「黒いベール」に覆われていても、国外で見た同じクウェートの女性の表情のなんと生き生きして美しかったことか。ホテルのパーティーでは（ただしあくまでも女性のみ）、ドアのまえまでは黒衣をまとっているが、いったんなかにはいれば、一着なん十数万円のドレスになん百万円の宝石を着け、まばゆいばかりだという。若い女性のなかには、ベールをとり、ホテルのプールで優雅に遊ぶ姿さえ見られる。今までの女性の地位・存在・意識に疑問をもち、考える女性、自分の意見をもつ女性になり、その「ベール」は大きくはがされつつあるように思う。

家庭における子どものしつけや教育決定は、父親がまだ絶対の権力をもっているようであるが、女性を所有物・財産としか考えず、男の子と女の子の育児に厳しい差別があった以前に比べると、男女の教育の機会均等などが浸透するに連れ、育児にも少しずつ変化が現れていると思われる。外国人の訪問客に、子どもたちをずらりと並べてあいさつさせるなど、大家族制度のなかにいわゆる西洋文化がはいり込んできている。

首長（国王）の子どもをはじめ上流の子弟が、アメリカンスクールに通っているのも興味深い。私たちが日常生活でアラビア語を話すまでもなく、「英語」で十分不便を感じないほど、人々に英語が普及しつつあるのに、優れた西洋文化をいち早く取入れたいという国の方針が読取られるようである。

いっばう遊牧民を定着させるために、砂ばくのなかに造った、延々と続く立派な建物は、ほとんど空家であ



祭礼の劇、昔の生活を見せる

るといわれる。お金をかけて設備・施設のほうが先行し、人々の心が、近代化に追付いていけない状態であることも、見逃さないであろう。

おわりに

石油が発見されるまえのクウェートは、アラビア湾に面した小さな村落で、海辺では大粒の美しい天然真珠がたくさん採れたと聞いている。それから数十年、ラクダを高級車に乗換え、テントを近代住宅に変え、黒衣のしたに流行の先端をいく洋服を着るようになった。あまりにも急激な変化・発展ばかりを追求めては、やがてどこかにひずみが出てくるのではないだろうか。石油によるあり余る利益を今後いかに生産的に活用し、ますます複雑になる国家機構を対外的にもいかにうまく運営していくかは、女性の開放とともに、若い指導者層の力に懸かっているといえるだろう。いや応なしに押寄せてくる文明の波に、良い意味での家族中心主義・家族団らんの風俗が残され、子どもたちの人懐っこいそばくさが失われないことを願わずにいられない。



(会議のシンボルマーク)

第6回国際社会福祉協議会 アジア西太平洋地域会議

郷 地 二 三 子
全国社会福祉協議会参事
「保育の友」編集部

国際社会福祉協議会と同地域会議

第6回国際社会福祉協議会アジア西太平洋地域会議が、オーストラリア社会サービス協議会を主催団体として、8月26日から9月1日まで、メルボルン・タウンハウスで開催された。

主題は、今年が国際連合の決議による国際児童年であることに合せて、Shaping the future for our children(子どもの未来を創造する)であった。

会議には19か国、350人が参加した。参加国はオーストラリア・バングラデシュ・ホンコン・インド・インドネシア・日本・韓国・マレーシア・ネパール・ニューヘブリデス・ニュージーランド・パキスタン・バブアニューギニア・フィリピン・シンガポール・スリランカ・台湾・タイ・ツバルである。

国際社会福祉協議会は当初1928年、「国際社会事業会議」と呼ばれ、第1回会議をバリで開催した。4年に1回ということで、第2回フランクフルト(1932年)、第3回ロンドン(1936年)、第4回は1940年、ブリュッセルで開かれる予定のところ戦争のために流れ、1946年、復活準備の会がブリュッセルで開かれた。第4回はアトランチックシティーとニューヨークにまたがって開かれ、このときから大会を2年に1回開くことにな

った。名称変更はアメリカの全国社会事業会議が、全国社会福祉協議会と改名されたことに関連している。

国際社会福祉協議会(ICSW;International Council on Social Welfare)は、現在約75か国にある国内委員会と、20に近い関連国際団体により構成されている。会員はそれぞれの国の公私の社会福祉機関や団体を代表する国内委員会単位となっており、他に国際団体としての会員がある。

世界を五つの地域(①ヨーロッパおよび中近東地中海、②アフリカ、③アジア西太平洋、④カナダ、北アメリカ、⑤ラテンアメリカおよびカリブ海地域)に分けている。地域会議は、隔年の世界大会のない年に行われている。

世界大会と地域会議の性格は、いわゆる学会ではなく、学者も行政官も団体役員、施設職員など関係者が、インフォーマルな気のおけない協議を行うものである。

第6回メルボルン会議

メルボルンでの第6回会議では、将来を築くための諸活動として、現状の調査、問題点の指摘、よりよい方法の検討、対策を指摘することが目標とされた。

これを達成するために次の諸項目が予定された。



会議場正面

①全体会議4回（児童福祉の今日的課題，地域事務局長・インド・ゴークレ氏，児童の未来の創造，国際児童福祉連合会長・インド・ベイグ夫人，私たちの子どものために〈対策・実施〉，キリスト教児童福祉会在日理事・日本・大谷嘉朗氏，明日の主題〈総括〉，ホンコン社会福祉協議会・フン夫人）。

②国別報告・三分散会。日本は統合保育について，トムソン氏（国際社会福祉協議会日本国委員会）が報告。

③円卓会議（1グループ10人，24グループ各10回）。

④施設訪問。

⑤大会準備のためのアンケート集約など。

東京を出発したときは，30度を超す夏気温であったが，10時間後，シドニー経由でメルボルンに着いたら気温5～9度，空港の花屋には黄水仙・アネモネの花東が飾られ，街はミモザ・桃・庭桜が咲く初春であった。

8月26日，静かな人通りの少ない日曜日の夕方6時から，メルボルン大学の近くにあるタウンハウスで，アジア西太平洋地域会議の開会式が催された。

会場の正面に各国の子どもの生活の写真が100葉ほど模様のようにレイアウトされ，そのうえに黄色の紙にブルーで「Shaping the future for our children」と書かれていた。壇上にインド・ホンコン・日本・オーストラリアの代表と，オーストラリア連邦の厚生大臣マーガレット女史，ビクトリア州の社会保障省の関係者が参列していた。

最初にホンコンのファイ副会長が，この会の話合いを充実し，相互に刺激を受合う会にしたいというあいさつがあって，次に朱色のドレスを着たマーガレット女史が1時間にわたり「オーストラリアの社会福祉」について報告した。このあとお茶の時間になり，和やかな交流が行われた。

最初にホンコンのファイ副会長が，この会の話合いを充実し，相互に刺激を受合う会にしたいというあいさつがあって，次に朱色のドレスを着たマーガレット女史が1時間にわたり「オーストラリアの社会福祉」について報告した。このあとお茶の時間になり，和やかな交流が行われた。

8月27日，ホンコンのファイ副会長から，オーストラリアで会議を開いたのは地元の強い希望によるものであることと，昨夜のマーガレット女史の，オーストラリアの社会福祉施策一年金，社会福祉施策の拡大一が国家予算の制約にかかわってきたこと，そのため政府が減税政策，社会保険を導入した報告は，アジア地域の今後の課題になるであろうと説明があった。

現代を変革するためのちよう戦

続いて児童福祉の現状、児童福祉の今日的課題について、インドの社協事務局長、ゴークレ氏の講演があった。アジア地域で重大なのは貧困問題であると指摘し、貧困の4要素（所得が足りない、基本的資源、衣食住と教育が足りない、生活に必要な情報不足、機会と政治的力に支えられていない）を挙げた。

また国連・アジア西太平洋経済社会委員会による貧困の主要要因として、経済の未開発性、人口爆発、時代に適応しない行政、均衡を失した中央中心の企画を引用した。

ゴークレ氏は「現代を変革するためのちよう戦」として、次の6つの課題を挙げた。①政策の方向を緩和するのか、根絶するのか、選択に迫られている。社会福祉の役割は先進国がたどってきた社会開発を、開発途上国がたどり得るのかについて、同じ歩みを避けるということ。②児童福祉の社会公正を実現、現実に合うように調整する。③必要な人にサービス。客が来るのを待つのではなく、需要にどうこたえるのか、必要なときに救援する。④担い手としての人の問題。専門家だけでなく、地域社会、家庭を巻き込んだ、総合的な訓練・配置が必要である。⑤児童福祉の経済学。子どもは発言権をもたないので、発言権のあるおとなの役割が大きい。⑥児童福祉の社会学。従来家族の担っていた役割を補強する児童福祉を強調し、いかにして必要な人に必要なサービスを確立するか。

これまで西欧の先進諸国は経済開発政策を優先したが、開発による公害・矛盾が現出し、不均衡をもたらしている。開発途上国では経済開発の道を選ぶのではなく、人間を大切にす道、つまり、かつてガンジー



マーガレット・オーストラリア厚生大臣、開会式場

の掲げた政策で「貧困の公正な分配」を強調した。ゴークレ氏が従来の経済開発指向から、人間優先の政策を打出した点が注目された。この日の夜は、ビクトリア州政府主催のレセプションが州議事堂で催された。

児童の未来の創造

8月29日、「児童の未来の創造」について、インドのベイブ夫人がブルーのサリー姿で講演した。女史は児童福祉は、フランス革命、ロシア革命、第二次世界大戦など戦争・革命のあとに政策が進んだ。今日の働く母のための保育所・養護施設などが集合的になったのは、フランス革命のあとにヨーロッパで始ったと、歴史的に説明した。また、環境の違いによって異なった考え方が生れる。たとえば、水の豊かな地方と水不足の地方とでは考え方が異なる。前者は努力しなくても豊かな生活ができるが、後者は生活が厳しくなり、難民に移行することを挙げた。

経済開発に対しては、社会学的・経済学的に種々な意見があるが、今回のテーマ、未来社会を変化させるためには、教育の問題は大きく、果す役割も大きい。今後、将来に向っての開発については、西洋が東洋から学ぶ時代になるであろうと結んだ。

私たちが子どものために

8月31日、「私たちが子どものために」で、日本の大谷嘉朗氏は、敗戦後、日本はララ・ケア物資で援助を受け、貧困・飢えから立直った。その後、高度経済成

長により社会は豊かになった。しかし豊かさが、子どもに豊かな状況をつくり出しているとは限らない。公害、人間疎外の状況が出現している。また先進国では、国の責任を強調するあまり、個人が受動的な立場に立たされる傾向にある。今後は地域に基礎をおいた市民参加の社会福祉を築き、相互依存の認識が必要だということを主張した。

小円卓会議

今回の地域会議の特徴となった小円卓会議は、第1日から、10人単位で、都市・スラム・農村・一般の子ども、障害のある子どもの問題など24グループで討議された。私は障害のある子どものグループに参加した。

討議は主講演のあと、児童をめぐる現況から始め、望ましい児童福祉サービスを実現するための行動戦略について、延べ10回の討議を、ホンコンが司会、オーストラリアが記録を担当して積上げていった。

日本とオーストラリアは、児童福祉の制度・施策が相似しているが、他の国は法制以前で、施策はこれからという状況であった。「緊急に必要なことはなにか」について、「食物・水」と答えるホンコン・インドネシ

アの実情と、障害児に対する一般市民の意識向上、親の会の活動の必要性を強調する日本とでは、討論の足並に隔たりを感じた。会議のリーダー格であった太宰博邦氏(全社協副会長)は、それぞれの国の実情が異なっていることについて、かつて日本でも、終戦直後は水と食物が必要な時代があったが、その後進歩して今日に至っている。現在、発展途上国で水と食物を必要としているのは、すべての子どもたちに関係することである。このグループでは、障害のある子どもの問題について検討しようと提案した。

その後は早期発見、早期治療、自立できるように訓練・教育の機会均等、職業の保障、普通人と共存できるように地域の人々の認識を高めるなど方向がまとめられた。4回目からの話合いで、障害のある人の結婚を禁止してはどうかということが、発展途上国の人たちから出されたとき、太宰氏は言下に、人間の尊厳として禁止すべきではないし、その判断は医師を主とした専門家にゆだねるべきだ。障害の要因が複雑で、現に二世には影響がなく健全な子どもが生れ育っていることを発言したとき、一瞬、静しゆくになった。

施設見学と個人宅訪問

8月29日午後、施設見学と個人宅訪問が行われた。オーストラリアの地域会議の関係者がセットした私の施設見学の案内状には、「Council for the single mother and her child」と記入してあった。母子寮のようなところというイメージで、この日、ビクトリア州の社会福祉サービスの事務所(都心の商店街のビル)へ、タイ・台湾・マレーシアの人たちと訪れた。私とシャオ女史(台湾)の2人は、そこから中華街にあるれん



会議場風景



当財団国際児童年記念事業で来日のデンバー市
児童の国際交流キャンプ参加。財団日より参照

が造りの古びた3階建のビルにある事務所に案内された。

ジェニー・ベルとジュディ・マクハングの話によると、2人とも単身母親で、ボランティア・コーディネーターとして、ここで母親たちの相談と子どもの一時保育に当たっていた。

単身母親とその子どもの協会は、オーストラリアの結婚していない、相手のない親の会である。1969年、民間で宗教的立場のないユニークな会を単身母親たちの手で作った。1971年、規模・活動の範囲を改め、1973年、全国の協議会をつくった。

協会の目的は、①未婚の母などの福利促進を図る、②結婚外に生れた子どもの順調な人生の出発を保障する、③単身母親と子どもを認めてもらう運動を推進し、経済的・法律的に差別のないようにする、④特に妊娠中、未婚の母をサポートし、宿泊・情報・法律知識などをカウンセラーが提供し、緊急保育サービス、乗物の提供、経済的援助をする、⑤互いを知合うために交流

する、⑥単身の母親や子どもたちによりサービスする運動を起す、⑦単身の母親がさらに教育を受けたり、イメージアップするために推進する、⑧子どもの父に子どもの福利・責任をもってもらうようにする、⑨研究と調査、⑩関連団体に働きかける、⑪全国的協議会を強化するなどである。会員は単身の母親と、なりつつある人で、未婚の母の子どももメンバーになれる。会員は毎月例会を開き、互いの情報を交換している。

子ども1人に1週71ドル70セントの

家族手当が支給されている（内訳：生活手当53ドル20セント、住居費5ドル、母親手当6ドル、子ども手当7ドル50セント、その他7ドル）。就職した場合、単身母親であることを申出ると税金の控除がなされる。

この日の夕方、ジェニー・ベルの自宅に招待された。ジェニーは30代、9歳の女兒の母、大学で社会学を専攻、教師をしていたが、現在、この協会でボランティア・コーディネーターとして、single motherの相談相手として働いている。かの女の自動車でメルボルンから1時間ほど離れた郊外のクライドンを通り、さらに走ることに10分、5年前に自力で購入したという3LDKの家に着いた。庭に庭桜・つばきが咲き、レモンが鈴なりに実っていた。

オーストラリアでは婦人の自立がもたらすのか、単身母親がふえている。ただし10代の単身母親の場合は、州の公共住宅が提供され、そこで生活していると聞いた。日本の資料と交換を約束して11時ころ帰宅した。

回 子どもについて語る

- 1430 ころ どの少年も同じ趣味と同じ程度の精神能力を現すものと期待すべきではない。ピットリノ・ダ・フェルトレ。
- 1529 子どもに一切を遊びと感じさせるような教授が行わなければならない。デジデリウス・エラスムス、幼児教育論。
- 1693 子どもの好奇心は知識への欲求にほかならない。それは良き徴候としてだけでなく、生れながらの無知を取除くため、自然が与えてくれた偉大な手段として奨励されなければならない。ジョン・ロック、教育に関する思考。
- 1762 アイスランドの氷のなかにでも、マルタ島の焼けつく岩のうえにでも生きていくことのできるよう、子ども自身に自分を保護することを学ばせるものが自由である。ジャン・ジャック・ルソー、エミール。
- 1780 親の手から子どもが食べるパンが、子どもの心情を育成するのであり、親が子どもの将来を心配して夜も眠られないことを子どもが知る驚きが、育成するのではない。ヨハン・ハインリヒ・ベスタロッチ、隠者の夕暮。
- 1803 国家が扶養できる以上に子どもを生むべきでない、と私が考える正確な理由は、生れた子どもができるだけ多く養育されるようにというにほかならない。社会的見地からすれば、貧窮の結果として生ずる10歳以下の子どもの死は、その歳までの扶養に投ぜられた費用の国民的損失を意味する。トマス・ロバート・マルサス、人口論(2版)。
- 1817 貧民の状態を改善するには、子どもに善良で有用な習慣だけを与えることが必要である。ある人々の労働が他の人より価値があるのは、受けたしつけと教育によるといえる。ロバート・オーエン、貧民労働者救済委員会への報告。
- 1821 賢明な監督者は子どもに、かれに適するものをひそかに見つけさせ、人間が往々にして天分から外れたがる回りを短くしてやる。ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ、ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代。
- 1826 なにごとにつけて少年は自己の力を鍛練し、測定しようと望む。その結果、体が強健になり、力が増大し、相応の力量を得ることになる。フリードリヒ・ウィルヘルム・アウグスト・フレーベル、人間の教育。
- 1829 幼児がなんでも手にしたがる傾向は、子どもを産業に導く自然のばねである。フランソア・マリー・シャルル・フーリエ、調和社会の教育。
- 1872 父兄たる者は子弟に愛育の情を厚くし、必ず学ばせなくてはならないのである。学制。
- 1879 生れてくる子どもは社会から歓迎される芽生えである。社会は子どものなかに自己の存続の可能と一層の発展をみる。それゆえに社会はこの新たな生存者を極力保育する義務を感じる。アウグスト・ベーベル、婦人と社会主義。
- 1900 20世紀は子どもの世紀である。子どもが太陽となり、周囲を教育上の営みが回転する。エレン・ケイ、子どもの世紀。
- 1902 子どものひとりが物好きに下水の口をのぞこうとすると、他の子どもが行っちゃいけない、その穴には毒があると注意する。これが貧乏人の子どもが仲間から受ける最初の教訓である。ピエール・クロボトキン、相互扶助。
- 1909 児童は、貧困だからといって、その理由のみで家庭から引離してはならない。ホワイトハウス会議勧告。
- 1924 児童が身体上ならびに精神上正常な発展を遂げるために、必要なあらゆる手段が講ぜられなければならない。ジュネーブ児童権利宣言。
- 1932 赤ちゃんが適応する最初の対象は、物質的世界でも物理的世界でもなく、周りの小さな社会、いろいろな人である。アンリ・ワロン、一般教養と職業指導。
- 1949 幼児は未知の力の持主であり、輝かしい未来へ案内する唯一の者である。真に新しい世界を望むならば、幼児の隠れた力を活用することほど大きいものはない。マリーア・モンテッソーリ、吸収する心。
- 1951 児童は、人として尊ばれる。児童憲章。

1954 世界子どもの日制定。国際連合。





アメリカの国際児童年記念郵便切手(実物大)

編集後記

本号は、前号に引続き、「国際児童年(IYC)特集号」として、前号に未掲載の国々(18か国)を選び、内容としては、各国の児童・母性福祉活動のなかで、特にユニークな活動を抽出して解説したものや、国によってはその風土と子どもの生活一般について取扱っているものです。

本号は前号同様に、できるだけ多くの国々を、それも世界の各文化圏にわたって取上げたい、という編集意図をもっているため、レバノン・クウェート・リベリア・ナイジェリアなど、本誌で初めて紹介される国々もあり、読者に新鮮味を与えるものと思います。

IYCもすでに4分の3の時間的経過をみましたが、私の手元にあるユニセフのレポートなどをみますと、各国のIYC事業計画も順調に進行しているようです。

わが国でも、IYCの啓発活動の中心的行事として、8月中旬に愛知青少年公園を会場として「世界と日本のこども展」が開催されました。政府がそこに出展したパビリオン「世界のこども館」では、愛・環境・希望と連帯の、

3つのテーマを設定し、世界中のすべての子どもたちが、等しく愛を享受しながら育ち、異なったさまざまな自然環境・社会環境のなかで、それぞれが伸び伸びとたくましく生きている現実の姿を描いております。

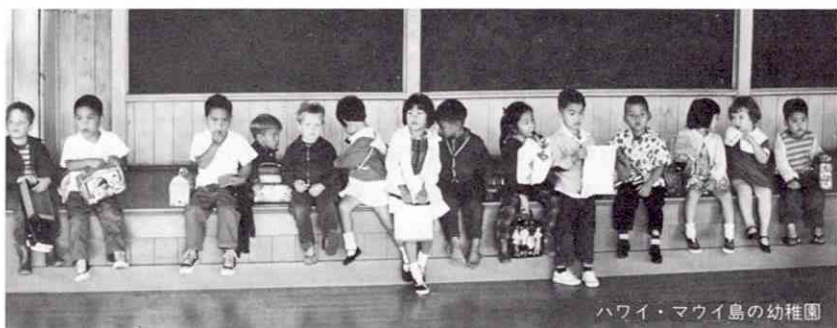
そして、子どもの希望と連帯こそが、明日の地球社会を支える大きな力となることを強調しております。これは、IYCに当り、子どもの福祉の向上を念願し、それに向けて行動すべき方向性を端的に表現しているものともいえましょう。

IYCを契機として、すべての子どもに確かな未来を与えるために、国際的な連帯による努力を継続しようとする気運が前進しつつあることは、真に喜ばしいことですが、ここで銘記すべきことは、WHO(世界保健機構)の本年の世界保健デーのテーマ「健やかな子 確かな未来」に当るPR資料をみてもわかりますように、世界の児童人口の大半は、開発途上国の子どもであるということです。そこには、本誌でもその生活の一部を紹介したように、未だ飢え・病気・貧困などに脅

えている子どもがいます。

国連の先進国向けIYCのガイドラインでは、国内の子ども福祉増進を図る諸施策の改善とともに、特に開発途上国の子どもの理解を増進し、援助の手を差伸べることが期待されています。IYCの、わが国のスローガン「わが子への愛を世界のどの子にも」に象徴されておりますように、IYCを元年として、世界中のすべての子どもへの愛を動機づけるために、本誌が啓発的な役割を演じてくれるよう願うものであります。

(編集委員 高城義太郎)



ハワイ・マウイ島の幼稚園

世界の児童と母性

—海外福祉情報—

年2回発行

第9号 昭和54年9月30日発行

編集・発行者

財団法人 資生堂社会福祉事業財団

東京都中央区銀座7丁目5番5号

電話 03-572-5111 郵便番号 104

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都 新宿区 市谷加賀町 1丁目12番地

財団だより

1979年3月

本誌第8号発行。
母子寮運営資料編集委員会開催。

4月

当財団国際児童年記念事業・アメリカ福祉施設児童の招日をアメリカ・コロラド州デンバーで関係団体と打合せ。

5月

第10回評議員会、第11回理事会開催。昭和53年度(第7期事業年度)事業報告ならびに決算報告を承認、昭和54年度(第8期)事業計画および役員を決定。退任一評議員・佐野良雄、渡辺 襄、

退任一監事・田中吉彦、

新任一評議員・北川良洪、上田健一、

当財団国際児童年記念事業・アメリカ・デンバー市施設児童の招日国際交流、フィリピン児童福祉事業中堅職員の招日交流研修会開催、第9回全国児童福祉施設用務職員永年勤続功労者顕彰(ハワイ派遣)を決定。

海外育児事情比較『世界の子ども・親』第2集(イタリア・スイス・オーストリア・チェコスロバキア・ポーランド・オランダ・デンマーク・ノルウェー・フィンランド・ニュージーランド・オーストラリア2報)刊行。

6月

フィリピン児童福祉事業中堅職の招

日交流研修会を、マニラその他で現地関係機関と打合せ。

7月

第9回全国児童福祉施設用務職員顕彰者選考委員会開催、52人を決定。

8月

当財団国際児童年記念事業・アメリカ・デンバー市施設児童21人を招日、7日～21日、国立中央こどもの国の国際交流キャンプに参加、なお児童代表は大平首相および厚生省を表敬訪問。

9月

第9回全国児童福祉施設永年功労者顕彰ハワイ施設訪問、26日～10月1日、

施設・団体・運動のシンボルマーク



小児病院CHILDREN'S HOSPITAL. 各科小児専用病院、ニューオーリーズ。(本誌7号36p.)



オンタリオ障害児センター ONTARIO CRIPPLED CHILDREN'S CENTRE. 障害児医療施設、トロント。



ネパール児童協会NEPAL CHILDREN'S ORGANIZATION. 貧窮家庭の乳幼児に補食サービスを行う国家機関、カトマンズ、会長、王妃。



シンガポール家族計画人口局 SINGAPORE FAMILY PLANNING AND POPULATION BOARD 標語「2人で十分」を掲げ公衆・教育・相談・医療サービス。



小児病院医療センター THE CHILDREN'S HOSPITAL MEDICAL CENTER. 治療・教育・研究のための小児総合病院、1869年創立、ボストン。



イラン青少年知能開発研究所 THE IRANIAN INSTITUTE FOR THE INTELLECTUAL DEVELOPMENT OF CHILDREN & YOUNG ADULTS. テヘラン。

財団法人
資生堂社会福祉事業財団

*SHISEIDO
SOCIAL WELFARE
FOUNDATION*